
DOG DAYS ~ 黒蒼の作り出す物語 ~

天照大神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS〜黒蒼の作り出す物語〜

【Nコード】

N7307T

【作者名】

天照大神

【あらすじ】

そこは動物の耳や尻尾を持った種族が暮らし、死傷者が出ずに、戦が外交手段として行われている異世界フロニヤルド

そこに召喚された勇者―津川優星が作り出す、新たな物語……

原作主人公、シンク・イズミは全く出てきません。シンクがいな
いと読めない！等の方々は直ぐにお戻り下さい

プロローグ（前書き）

やってしまいました・・・

バカな私をどうか許して下さい・・・

では、どうぞ！・・・

プロローグ

何処か中世の時代のような城

その城内の一室に数人の人影が集まって、なにやら話をしていた・・・

「やはりガレット獅子団の兵士達は「リオン砦」を攻めに来るようですね」

「ガレットの連中、本気でこの城まで進行してくるつもりでしょうか・・・」

凜として青年と、翠色の髪の少女がその場にいる人物に話す

「ガレット獅子団のレオンミシエリ閣下は有望な方ではあったが、このような無茶をするようなお方だったかのお・・・？」

「理由はどうかあれ、この数戦はひたすら負け戦じゃ……」

「せめて……ダルキアン卿や、テンコ様がいてくれたらのお・
……」

3人の老人が、各々の思っていた事を言う

「騎士ブリオッシュや、ユキカゼにもそれぞれ使命がありますれば」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪の場合、この「フィリアンノ城」まで……」

「それは……!」

「させません……! 姫様の為にも、ビスコッティの民の為にも、この戦は我々が……!」

翠色の髪の少女が席から立ち上がって力強く言う

「エクレ？今はその姫様の御前でありますよ？」

エクレ「あ……失礼しました」

オレンジ色の髪の少女が翠色の髪の少女―エクレと呼んだ少女に注意し、エクレは席に座る

「有難う……みんな」

部屋内に優しい声が響く

それと同時に、部屋にいる全員が声の主の方を向く

「我がビスコッティの苦しい戦況、良く分かりました」

その声の主は、自身の席を立って話し始める

「今回は本当に負けるわけにはいかない戦です……ですから、最後の切り札を使おうと思います!!」

その言葉で部屋内にざわめきが始まる……

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・F・ビスコッティの名
において……我が国に、勇者を召喚します!!!」

? side

僕が突然彼女達の前から姿を消してから6年、ようやく戻ってきた僕は彼女達の仕事を手伝いながら過ごしていた

??<マスター、今日はフェイトさんの補佐だったでしょうか?>

?「うん、エクス。待たせるのも悪いから、早くフェイトの部屋に行こうか」

時空管理局本局、次元航空艦で執務官の仕事をしているフェイト・
デスタロツサ
T・ハラオウンの補佐をするために、僕は彼女が滞在している次元航空艦の艦内を進む

しかし、彼女の部屋の前に着いた時に「異変」が起きた

——キイイイイイイイン………

??<マスター!?!これは!?!>

?「ま、魔法陣…….?」

僕の足元に桃色の魔法陣が突然現れ、その魔法陣の中に閉じ込められてしまう

???「どうしたの——って、これは!?!」

その部屋の中から、彼女—フェイトが出てくる

——!

?「え…….?」

魔法陣の光が強くなると同時に、何かが僕の心に伝わってくる

どうか――！

それはとても強い思い、それが分かった僕は目の前で呆然としているフェイトに申し訳ない顔をする

？「ごめんねフェイト……必ず、帰ってくるから」

フェイト「え……？ま、待って――わ、私も……！！」

フェイトは魔法陣に手を伸ばすが、視えない壁に阻まれるかのように手は空中で止まってしまう

フェイト「嫌だ……嫌だよ……もう、――と離れるなんて……！！」

涙を零しながら、思いを告げるフェイト

？「大丈夫……僕は、必ず――」

そう言い放つ前に、僕の身体は魔法陣と共に消えその場にはフェイトだけが取り残された……

「あ、あの……！」

？「ん・・・・・・・・」

声が聞こえ、目を開けると目の前には1人の少女が立っていた

？「此処は・・・・・・・・」

辺りを見回すと何処かおとぎ話のような地形が広がる大地が、周りから見渡せた

？（女の子・・・・・・・・って、犬耳に尻尾・・・・・・・・？）

少女「初めまして、召喚に応えて頂いた勇者様でいらっしゃいますね？」

？「勇者・・・・・・・・？」

少女「私．．．勇者様を召喚させて頂きました．．．ここ、ビスコッティ共和国、フィリアン^{フィリアン}ノ領の領主を務めさせて頂いております、ミルヒオーレ・F・ビスコッティと申します」

？「あ、はい．．．」

ミルヒ「突然、此方の都合で勇者様を召喚してしまい．．．申し訳ありませんでした」

少女―ミルヒ王女は僕の目の前で頭を下げて謝る

？「あの思いは．．．君の？」

ミルヒ「思い．．．ですか？」

？「うん．．．あの魔法陣から、強い思いを感じたんだ．．．」

・優しくて、とても強い思いを・・・」

それを聞いたミルヒ王女は何処か驚いた表情をしながら、僕を見つめている

ミルヒ「その・・・私達のお話を聞いたうえで、お力をお貸しして頂く事は可能でしょうか？」

？「力・・・？」

その時、遠くのほうから、花火のような合図が上がった音が聞こえた

ミルヒ「いけない！！もう始まっちゃってる！！」

？「始まってる？」

ミルヒ「はい……我がビスコッティは、今……隣国と戦
をしています」

僕は……僕達がいた場所から繋がっていた階段を駆け下りなが
らミルヒ王女から軽く話を聞いていた

？「あれは……鳥？」

ミルヒ「セルクルをご覧になるのは初めてですか？」

？「あ、はい……僕の世界には、いなくて……」

ミルヒ「私のセルクル、ハーランです」

ミルヒ王女はその鳥―セルクルに乗って、説明する

ミルヒ「どうぞ、お乗りください」

ミルヒは僕に手を差し伸べて後ろに乗るように促す

？「あ、その……僕は、自分で移動出来ますよ」

ミルヒ「ご自分で……ですか？」

？「はい」

そういつて僕は、ポケットにしまっていた相棒を取り出す

ミルヒ「勇者様、それは・・・?」

?「僕の相棒です。エクス」

エクス<はい、マスター>

取り出した一枚のカードの中央にある蒼い宝石が光ると同時にエクスが喋る

ミルヒ「これは・・・?」

?「僕の世界では・・・デバイスにAIが付いているものがあるんです」

ミルヒ「は、はあ……………」

？「さあ……………行くよ、エクス！！！」

エクス<はい！！！！S a t n d b y r e a d y！！！！ S e t
u p！！！！>

エクスの言葉と同時に、僕の身体が蒼い光に包まれ、黒い服装に銀色のマントをなびかせた姿に変わった

ミルヒ「え、ええええええええええ！！？」

ミルヒは驚いて、ハーランの背中から落ちそうになる

？「つと、危ないですよ」

僕はとっさに手を伸ばして、ミルヒを支える

ミルヒ「あ、有難う……ございます／＼／＼／」

ミルヒはお礼を言ったが、その頬は赤く染まっていた

？「とにかく……僕は、これで移動出来ますから」

ミルヒ「あ、はい……なら、移動の際に……戦について説明をしますね」

僕はそれに頷くと飛行魔法を使って浮遊する

ミルヒ「ゆ、勇者様は空も飛べるんですか!？」

？「は、はい……………」

ミルヒ「す、凄いです……………」

目を光らせながら僕を見つめているミルヒ王女

？「それでは、案内をお願いしても……………」

ミルヒ「は、はい！！勇者様には、まず神剣をお渡しする為に一度城に来て頂きます！」

？「分かりました」

ミルヒ王女の言葉に応え、その場所から移動を始める

ミルヒ「あ、あの……………勇者様のお名前は？」

？「僕の名前ですか………？僕は――」

「あ――！姫様が勇者様をお連れして帰ってくるであります――！！」

「「「おお――！！！！」」」

城に設置されている望遠鏡から覗いているオレンジ色の少女が周りにいる老人達に伝える

《今、大変なニュースが入りました！！ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しました！！これは凄い！！戦場に勇者が現れるのをお目にするのは私も初めてです！！！》

この戦を実況している1人の男が、音響マイクを使って戦場にいる全員に伝える

ーピク

「ん？」

銀色の髪で、威厳を放つような容姿をしている1人の女性が猫耳をピクつとさせてその実況を聞く

《さあ！！ビスコッティの勇者はどんな勇者だ！？》

実況するその声と同時に、戦場から歓声が湧きあがっていく

「勇者殿が！？」

「本当に！？」

凜とした犬耳の青年と翠色の髪の少女が実況に耳を傾け、驚く

「姫様！！！！」

城の塔の一角で、オレンジ色の髪の少女がミルヒの帰還に出迎える

ミルヒ「リコ、ただいまです！！」

リコ「お帰りなさいであります！！」

リコと呼ばれた少女は、ミルヒに音響マイクのようなものを手渡す

リコ「勇者様、来てくれたんでありますね！！！」

ミルヒ「はい。私達の……素敵な勇者様です！」

ミルヒはマイクをしっかりともって、塔の一角から外を見渡せる位置に立つ

ミルヒ《ビスコッティのみなさん、ガレット獅子団のみなさん。お待ちせしました》

ミルヒの言葉に、一端戦場にいる兵士たちの動きが止まる

ミルヒ《近頃敗戦続きな我らがビスコッティですが……そんな残念展開は、今日を限りでお終いです！！！！》

どこか嬉しそうな声で、言葉続けるミルヒ

ミルヒ《ビスコッティに、希望と勝利をもたらしてくれる……素敵な勇者様が、来て下さいましたから！！！！》

それと同時に、戦場の様子を映している空中に浮いている映像に木々で作られた組み木の上に立っている黒い服装、銀色のマント、両手に剣を持つ1人の人物が映る

ミルヒ《華麗に鮮烈に……戦場に、ご登場頂きましょう！！！！》

——おおおおおおおお！！！！！！

戦場にいる兵士たちから歓声が湧きあがる

《ミルヒオーレ姫!!!勇者様のお名前をお聞きしてもよろしいで
しょうか!?!?》

ミルヒ《はい!!!我がビスコッティ共和国に召喚して頂いた——》

?「はっ!?!?!」

その人物は両手の剣を空中に投げ、組み木の上から回転しながら飛
び立つ

ミルヒ「あの……勇者様のお名前は?」

?「僕の名前ですか……?僕は——」

ミルヒ《優星……勇者、津川優星です！！！！》

その人物―優星は地面に着地すると同時に上空に投げた剣を再び両手でキャッチする

立ちあがると同時に、両手の剣をしっかりと構える優星

優星「姫様からのお呼びにあずかり、勇者津川優星！！ただいま見参！！！！！！」

今――津川優星が作り出す、別の物語が始まった……………

第1話 初めての戦

優星 side

《ゆ、ゆ、ゆ、勇者降臨!!! 此処フロニヤルドで、国を治める王や領主にのみ許された勇者召喚!!!!!!》

《私も、見るのは初めてです》

《そう!!! その勇者が今!!! 我々の前に現れました!!!!!!》

そんな実況を聞きながら、城の塔の一角から戦を見ているミルと姫に僕は手を振って、先程合つように言われた人物の元に向け足で歩く

「うん。ルールもルールもしっかり覚えてくれているようだね」

優星「はい、姫様が教えてくれました」

「うむ・・・勇者殿は召喚されて、姫様と出会ってどう思った？」

優星「可愛くて優しそうな・・・素敵な姫様だなんて思いました」

「素晴らしい！！ああ、私はビスコッティ騎士団の騎士団長。ロラン・マルティノッジだ」

優星「津川優星です」

僕はロランさんと握手をし、此方に向かってきてるガレット獅子団の兵士たちを見る

ロラン「では勇者殿！！前衛にいるエクレールと合流を！！」

勇者「はい！！」

ロランさんの言葉に応えた僕は剣状態のエクスと先程貰った聖剣を握りしめ駆け出した

ミルヒ『此处、フロニヤルドの戦は純粹に競技として行っている意味合いもあります』

優星『競技？』

ミルヒ『はい。フロニヤルドの大地から溢れているフロニヤ力は、この世界出身の人達を守ってくれているんです』

移動しながら姫様から戦についての説明を聞き、理解していく

ミルヒ『兵士達が戦でダメージを受けると「けものだま」というものに变身して、戦からは離脱します。あ、でも早く離脱した場合にはまだ復帰するチャンスがあるんです！』

優星『へえ……』

ミルヒ『フロニヤ力のおかげで、誰も傷つかず、皆が楽しめる戦が出来てるんです』

優星『そうなんですか……』

ミルヒ『あ、勇者様に1つだけご注意が……。今、勇者様が使っているその……』

優星『飛行魔法ですか？』

ミルヒ『はい。その力・・・魔法は、戦では使用してほしくないんです。みんな、競技のスポーツ精神に則って参加しているので』

優星『分かりました』

「勇者覚悟おおおおー！！！！」

「勇者を倒せば、俺達の勝ちだああああー！！！！」

僕に向かってくるガレット獅子団の兵士たちを剣であしらいながら
姫様の言葉を思い出す優星

すれ違いに背中等にタッチして、兵士たちの間を抜ける

「へ？」

「あ？」

——ポーン——！！

すれ違った数人の兵士達がけものだま——ねこだまに変身する

エクス<流石ですね、マスター>

優星「うん、大体感じは掴めてきたよ。さ、はやくロランさんが言
ってたエクレールって人の元に向かおう」

エクス<はい>

優星 s i d e o u t

エクレール s i d e

戦の実況を聞いていた私はその事実にいらついてくる

私が立っている先には何十人ものガレットの兵士達が向かってきている

エクレール「勇者なんかなくなつて……」

私はそう呟いて紋章術を展開し

エクレール「はあああああ……!!!!」

両手の短剣に紋章術の力を載せ、ガレットの兵士たちに向けて衝撃波を飛ばした

——ポポポポポポ————ン!!!!!!

衝撃波の衝突によつて煙が舞うと同時にガレットの兵士達がねこだまに変化するいつもの音が聞こえる

「もらったああああ……!!」

エクレール「!?!」

後ろから声が聞こえ、振り向くとガレットの兵士が1人回り込んでいた

反応が遅れ、剣を振る時間が無い

エクレール（やられ………!）

?「はあああああ!!!!」

「がはっ!?!」

そこに横から飛び蹴りをしてきた1人の男がその兵士に蹴りを命中させ、兵士はねこだまになった

？「つと．．．君が、エクレール？」

エクレール「．．．．．そうだ」

そいつは私の方をみて、確認してくる

？「僕は姫様の召喚に応じた勇者、津川優星です」

エクレール「知っている。あれだけ実況されたのだからな」

優星「その．．．いきなりなんだけど、姫様から伝言が」

エクレール「姫様から？」

私は勇者の言葉に耳をピクつとさせる

優星「さっきエクレールが使ってた……えっと、紋章術？それを僕に教えてと……」

エクレール「断る。何故貴様なんかに……」

優星「え、でも……姫様が紋章術を扱うならエクレールが1番だって」

エクレール「！！姫様……が」

勇者の言葉に、私の中に喜びが占めてくる

エクレール「仕方ない、いいか紋章術は――」

エクレール side out

優星 s i d e

エクレールから紋章術の使用方法を聞き、向こうから向かってきているガレットの兵士達に対して試し打ちをする事になった

エクレール「いくぞ勇者!!」

優星「オッケー!!!」

エクレールは翠色の紋章を出現させ、両手の短剣を構える

僕は、右手のエクスと左手の神剣―パラディオンを×の形に交差するように構える

優星「……………」

意識を集中させると、僕の背中に蒼い紋章が浮かぶ

エクレール「てえええええい！！！！！」

エクレールの放った衝撃波が突き進み、ガレットの兵士に直撃する

優星「はああああああ！！！！！！！」

エクスとパラディオンを振るうと、両方の剣から衝撃波が発生し直線状に突き進んでいった

ドオオオオオオオオオオ！！！！！！

再び煙がまい、大量のねこだまが地面に落ちてくる

優星「ふう……意外と疲れるね、これ」

エクレール「紋章術は自分の命を使ってもいるんだ。使いどころには気をつけ——」

その時、何かを感じた僕はとっさにエクレールの身体を引っ張っていた

ドゴオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

先程まで僕達がいた場所が煙に包まれ、エクレールは呆然としている

優星「い、一体なにが……」

エクレール「ゆゆゆ勇者……」

優星「なに、エク……レー……ル」

エクレールの声に反応し僕はエクレールを見る

今の僕達の恰好は、僕がエクレールを押し倒し、さらには彼女の胸を触っている状態であつた

優星「……………」

エクレール「い、いいから早くどけ!!あの方が……」

エクレールの上から退くと、近くの高台にいる1人の銀髪で金色の瞳の女性に気がついた

その人は黒いセルクルによって此方をみていた

「ほう……貴様があの犬姫が召喚してという勇者か……」

優星「エクレール……あの人は」

エクレール「ガレット獅子団の領主、レオンミシエリ閣下だ……」

優星「領主って……ミルヒ姫様と同じお姫様!？」

「無礼者!! わしの名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。そのたれ耳が言った通りガレット獅子団領の領主……閣下と呼ばれるか!?!」

そう言って、レオンミシエリ閣下はセルクルから降りて両手剣を構える

レオンミシエリ「神剣パラディオンが発動し、剣の状態を保っているか……」

レオンミシエリは優星が持っている左手のパラディオンを見つめる

レオンミシエリ「面白い……2人纏めて掛かってくるがいい……」

エクレール「……勇者」

優星「うん……」

エクレール「いいか、レオン閣下は他の兵士とはわけが違う……」

・一気にいくぞ！！」

優星「分かった！！！」

エクレールに頷くと、僕達はそれぞれの武器を構え

エクレール「はあああああ！！！！！」

優星「おおおおおおお！！！！！！！」

レオンミシェリ閣下に向かって走り出した

エクレール「はあ！！！！」

レオンミシエリ「ふん！！！」

エクレールが両手剣で素早く斬り込むがレオンミシエリは片方の剣でそれを止め、弾き返す

優星「こっちだ！！！」

それをみた優星が反対側からエクスで斬りかかる

レオンミシエリ「甘い！！！」

レオンミシエリは冷静にもう片方の剣で優星の2本の剣を止め、空いた片方の剣で優星を弾きとばす

優星（強い……剣技がシグナムさんに劣っていないどころか、それ以上に感じる）

レオンミシエリ「ふむ……戦の時間も残り僅かか……」

そう呟いたレオンミシエリ閣下は両手剣を構える

優星「何を……」

エクレール「まさか!？」

レオンミシエリ「これを喰らって……まだ立てるか、勇者!」

レオンミシェリ閣下はそう言って、背中に自身の紋章を出現させる

優星「なっ……………」

レオンミシェリ「喰らえ！！獅子王……………炎陣大爆破！！！！」

振りおろされた剣と同時に、辺り一帯が激しい爆炎に包まれる

《で、でたあああああ！？レオンミシェリ閣下の必殺、獅子王炎陣大爆破！！！！》

《凄まじい威力ですが、周りの兵士たちも巻き添えを喰らっていますね……………》

実況の言つとおり、周りで戦闘をしていた両方の兵士達が巻き込まれけものだまに変身していた

《さあ！？勇者と親衛隊長は無事なのか！？》

煙が晴れはじめ、レオンミシエリは両手剣を構える

しかし、そこには優星とエクレールの姿は無かった

《き、消えた！？勇者と親衛隊長の姿が何処にもありません！！――
体何処に……》

ふと、レオンミシエリが上空を見上げ、実況をしている人達も上を見上げる

そこには上から紋章術を準備している2人の姿があった

《う、上だーーーー！！勇者と親衛隊長！！！レオン閣下のあの獅子王炎陣大爆破を、上空に逃げる事で回避していたーーーー！！》

エクレール「いいか勇者！！一撃で仕留めるぞ！！」

優星「うん！！！」

それをみたレオンミシエリは両手の剣をしっかりと構える

エクレール「いつけええええ！！！！！」

優星「え！？うわあああああ！！？」

エクレールは空中で優星の背中を蹴り押し、優星の落下スピードを加速させた

優星「ちょ！？いきなり何を・・・・ああ、もう！！！」

優星はエクレールに蹴り押された事を一端忘れ、レオンミシエリを

見る

レオンミシエリ「はあ!」

優星「!」

落下と同時に2人の剣がぶつかる

「ガキイイン!」

落下スピードと優星の力が勝っていたのか、レオンミシエリの持っていた片方の剣が折れてしまう

エクレール「はあああああ!」

レオンミシエリ「!」

後から落ちてきたエクレールの一閃を残った剣で受けるレオンミシエリ

―ガキイイイン！！！！

しかし、その剣も折れ、武装がなくなってしまう

優星・エクレール「うおおおおお！！！！！！」

レオンミシエリの左右から2人同時に斬りかかり

―パキイイイイイイイン！！！！

レオンミシエリの着ていた装甲が壊れた

優星「よし・・・・・・・・!!」

優星が後ろを向くと、胸元が大きく開き、ズボンの裾がかなり短い
恰好のレオンミシエリがそこに立っていた

優星「つ・・・・・・・・／／／／／」

優星はそれを見て顔を少し赤くする

レオンミシエリ「ふむ・・・・・・・・これではもう戦えんな」

エクレール「レオンミシエリ閣下・・・・・・・・それでは」

レオンミシエリ「うむ、わしはここで降参じゃ」

レオンミシェリは手のひらサイズの白いフラッグをだしてそう言う

《な、な、な、なんと……！此処でレオン閣下脱落……！！！
ビスコッティ側に大量のポイントが入ります……！！》

《これでは、流石にガレット側も追い付くのは大変でしょう。今回は、ビスコッティ側が勝ちそうですね》

《しかし……まだ戦は終わってません……！！兵士の皆さま、最後まで全力で頑張ってください……！！》

——オオオオオオオオオオオ……！！！！

優星 s i d e o u t

第2話 帰りたくても帰れない！？ 勇者inフロニヤルド（前書き）

ロラン side

フィリアンノ城防衛線、勝利の鍵は姫様召喚した勇者の少年

アメリカ「ですが、勇者様にある1つの事実が……」

「戦場では活躍してくれたんだが……その事実には大丈夫だろうか？」

アメリカ「勇者様、きっとお困りになられるでしょう……」

「だがまあ、こんな時は……」

リコッタ「このリコッタ・エルマールが何とかするであります……」

第2話 帰りたくても帰れない！？ 勇者inフロニヤルド

3人称 side

あれから数十分後、戦の終戦のアラームがなりビスコッティが勝利の形で終戦した

しかし……………

エクレール「大体貴様は！！！！戦中にも関わらず——」

優星「……………すみません」

優星は、エクレールから絶賛お説教中だった

原因は、レオンミシエリ閣下を倒した時……………

あの後、レオンミシエリ閣下から称賛のお言葉をもらった僕だったが、その時に使ったマイクをエクレールに渡した瞬間、彼女が来ていた服がビリビリに破れたのである

実況担当の方々が記録を見直すと、レオンミシエリ閣下を攻撃する際にエクスの剣がほんの少しかすっていたらしい

そのため、既に破れそうな服装の状態に、慌ててマイクを受け取る
うとしたエクレールの動きで破れた・・・らしい

エクレール「聞いているのか、勇者!？」

優星「は、はい!!」

ロラン「エクレール、そこまですておくんだ」

そこにロランさんがやってきて説教を止める

エクレール「しかし・・・」

優星「あ、そうだ・・・僕そろそろ帰らないと・・・」

ロラン「帰るとは……勇者様の世界にか？」

優星「はい、待たせてる人^{フエイト}が……」

ロラン「しかし、勇者召喚に応じた人達は帰る手段はありませんが」

優星「……え？」

ミルヒ「あ、そういえば勇者様……お時間は大丈夫なのでし
ょうか？」

リコッタ「姫様、大丈夫とは？」

場内をリコッタと歩いていたミルヒはふと、思いだしたように言った

ミルヒ「はい、勇者様は待たせている方がいるというので、戦が終わり次第直ぐに帰ると……」

リコッタ「でも、姫様？勇者召喚に応じた勇者様は元の世界に戻れないでありますよ？」

リコッタの言葉に足を止めるミルヒ

ミルヒ「ま、まさかぁ…………でも、何か方法が」

リコッタ「だーかーらー！！帰れないんですよ……！！」

リコッタの力強い言葉に汗が流れ出すミルヒ

ていくという事で・・・今回は、その・・・》

実況担当の人達の声に、映像に映り質問に答えるロラン

その近くの木の傍でエクレールがロランの言葉に目を閉じながら後ろを向く

エクレール「は、ナイス判断です。兄上」

優星「帰れない・・・僕はここから帰れない・・・」

エクス<マ、マスター・・・・・・・・>

エクレール（こんな勇者、表に出せません・・・・・・・・）

エクレールは頭に手を乗せ呆れていた

ミルヒ「あゝ本当にどうしましょう!？勇者様、元の世界に帰れないなんて……」

場内の一室で、この後のイベントの為に着替えているミルヒが困り果てたように言う

「確かに勇者様、お困りでいられましょうね……」

メイドの1人が着付けを手伝いながらミルヒに言う

ミルヒ「ふえええ………どうしましょう………(TOT)」

ミルヒは軽く泣きながら秘書のアメリタに訴える

アメリタ「とはいえ、姫様には姫様のお仕事が有らせられます」

その手にびっしりと書かれた手帳をみながら厳しくミルヒに言うアメリタ

ミルヒ「あうう……でもアメリタ！」「この後は両国選手への労いのお言葉、レオ閣下への終戦のご挨拶と、戦勝国代表インタビュー、興業に協賛を頂いた団体へのお礼」

手帳を閉じ、びしっとミルヒを見るアメリタ

ミルヒ「うう……」

アメリタ「この後のコンサートもリハ抜きでやるわけにはいきませんし、少なくとも本日は勇者様の問題は学園組に任せて頂けません」と

ミルヒ「……はい」

アメリカの要求に、仕方なく頷くミルヒであった

ミルヒ「それにこの手の事は姫のご学友、エルマール主席は頑張ってくれる事でしょう」

リコッタ（召喚した勇者を元の世界に帰す方法探し）

場内の廊下を本を抱えながら走るリコッタ

一度息を整える為に、止まって深呼吸をする

リコッタ（姫様の召喚をお止めしなかったのも、ちゃんと確認しなかったのも、自分の責任であります。姫様の悲しい顔は、見たくないのであります）

気合いを入れなおし、再び廊下を走っていったリコッタであった・・・

3人称 s i d e o u t

優星 s i d e

街にエクレールと来た僕は、ベンチに座って端末を確認していた

優星「やっぱりかぁ・・・・・・・・繋がないよね。異世界だもんなあ
・・・・・・・・」

エクス<しかし、次元世界対応の端末が通じないとなると、平行世界等の可能性もありますね>

エクレール「まったく、覚悟もないのに召喚に応じたりするからだ」

優星「はぁ……………」

エクレール「まあ、なんだ……………一応は貴様は賓客扱いだ、こちらでの生活に不憫な事はさせん」

そういつてエクレールは僕の前に1つの巾着を取り出してくる

エクレール「戦での報奨金だ、ありがたく受け取っておけ」

優星「え、でも……………」

エクレール「拒否などすれば財務の担当者が青ざめる」

優星「……………分かった」

しぶしぶ巾着を受け取る優星だった

エクレールエクレールから戦についての細かい内容等を聞きながら
城に到着し、移動を続ける

エクレール「とりあえずリコの元に向かうぞ」

優星「え？あ……うん」

エクレール「案外なにかしんちやくがあつたかもしれん」

優星「あ．．．うん！！」

リコッタ「申し訳ないであります！！このリコッタ・エルマール、誠心誠意勇者様がご帰還される方法を探していたでありますが．．．．．」

図書室というか、書庫のような場所に着くとオレンジ色の髪の少女が出迎えており、いきなりそう言いながら謝ってきた

リコッタ「力及ばず、今だ何ともこうにも．．．．．」

エクレール「いやリコ、落ちつけ。私も優者もそんなにすぐ見つかるとは思っていない」

優星「．．．．．え？」

リコッタ「ああ……ですが」

優星「ああ……そ、そっだよ」

落ちこみ続けるリコッタに僕はそう声をかける

リコッタ「ほ、本当でありますか？」

エクレール「期限について何か言ってたな？何時までだ？」

優星「えっと……みんな心配するだろうし、少なくとも30日以内かな？」

リコッタ「30日……それなら希望が湧いてきたであります
！！」

優星「うん、お願いします」

僕は笑顔でリコッタに言った

優星（しかし、リコッタの声……どこかフェイトに似てるよなあ……）

・それはそうだろう、何せ中のひと——いや、何でもない

優星（フェイト……大丈夫かな？本当は、今すぐ戻りたいけど……今は艦に乗ってもう居ないだろうし）

優星 side out

フェイト side

フェイト「……………はあ」

優星が消えてから数時間、既にその事をなのは達に伝え私は部屋のベッドの上で休んでいた

フェイト「優星……………」

私は優星の名前を呟きながら一枚のカードを取り出した

それにはバリアジャケットを来ている私の姿が映っている

優星『必ず、帰ってくるから———』

優星の言葉を信じられない訳じゃない、でも……………

フェイト「やっぱり不安だよ、優星……………」

カードをギュツと握りしめ、私の閉じた目から涙が数滴零れていた
涙がカードに落ちた瞬間、カードが小さく輝いていたのにフェイト
は気が付いていなかった

フェイト side out

優星 side

優星「はぁ・・・・・・・・・・凄いなぁ、まさか露天風呂なんて」

エクレールに言われ、姫様が歌うコンサートの直前にお風呂に入る事になった僕は、見つけたお風呂の大きさ、天井から夜空が見上げられる事に驚いていた

優星「うん・・・・・・・・・・やっぱりお風呂はいいなぁ」

湯船に浸かってお風呂の良さを堪能する

ーバシャ・・・・・・・・・・

優星「あれ・・・・・・・・・・？だれか先客が・・・・・・・・・・？」

水の音が聞こえ、そちらの方に目を向ける優星

そこにはシャワーで頭を洗っているピンク色の髪の人がいた

洗い終わったのか、両耳が水を弾くようにフルフルと動く

優星「あ——」

尻尾も同様のようフルフルと動き水を弾く

優星「え——／／／」

ミルヒ「あ……勇者様？」

それは僕を召喚した張本人、ミルヒオーレ姫様だった

数秒間、僕とミルヒオーレ姫様は互いの姿を見つめあっていた

優星「ああ！？／／／」

ミルヒ「きゃああああ!?!?!」

ミルヒオーレ姫様は身体を隠すように、背を向けてしゃがむ

優星「見てません見てません!?!?!ご、ごめんなさい!?!」

僕も同様に姫様から視線を外す

僕は湯船に顔を沈ませ落ち着こうとする

そして、一端目だけを湯船から出す

ミルヒ「す、すみません勇者様。わたし、普段は此处を使えなくて・
・・・それで」

優星「つゝゝゝゝ／／／」

ミルヒオーレ姫様が僕に対してそう言うが、その体勢が色々危なくて僕は背を向けてしまう

ミルヒ「わ、私もうあがりますのでゆ、勇者さまはどうぞぐぐゆっく
り！ー！！」

ミルヒオーレ姫様はそういってお風呂場から走り去っていった

優星「はあ……はあ」

息を落ち着かせ、再び天井を見上げる優星

ミルヒ「あの、勇者様……」

優星「あ、はい！」

入り口の扉から顔だけを出して僕に話しかけるミルヒオーレ姫様

ミルヒ「召喚の事とか、勇者様にお話したい事沢山あるんです。ですから……コンサートが終わったら、少しお時間を頂けませんか？」

優星「あ、はい！！勿論です！！！」

ミルヒ「有難うございます。では、また後ほど」

ミルヒオーレ姫様はそう言って本当にお風呂場から出て行った

ミルヒ「きゃあああああああ!?!」

優星「はっ!?!」

突然、姫様の悲鳴が聞こえ僕は素早く着替えて外に向かう

優星「……………は!?!」

建物の屋根の上、そこに人影を見つけた僕はそこを見上げる

ミルヒ「ん————!!んん————!!!?!」

ミルヒオーレ姫様は手を縛られ、口にテープをされて喋れない状態で黒髪の女の子に抱きかかえられていた

？「我ら、ガレット獅子団領！」

？？「ガウル殿下の直属、秘密諜報部隊！！」

？・？？「ジエノワーズ！！！」

優星「姫様！！！」

「こつちだ！！」

僕の声に反応し、待機していたカメラをもつ人達が僕をカメラに映す

？？？「ビスコッティの勇者殿、あなたの大事な姫様は我々が攫わせて頂きます」

ミルヒ「んーーーーー！？」

??「うちらはミオン砦で待ってるからなー!!」

?「姫様がコンサートで歌われる時間まで、後一刻半。無事助けに来られますか？」

ミルヒ「んーーーーー!!」

画面に不安そうなミルヒオーレ姫様の顔が映る

???「つまり、大陸協定に基づいて要人誘拐奪還戦を開始させて頂きたいと思います。こちらの兵力は200、ガウル様直下の精鋭部隊」

?「で、ガウル様は勇者様と一騎打ちを御所望です」

??「勇者さんが断ったら、姫様がどうなるか!？」

ミルヒ「んんーーーーんーーーーん！？」

優星「っ………受けて立つに決まってる！！！」

ミルヒ「んっ！！？」

優星「僕は姫様に呼んでもらった、ビスコッティの勇者優星だ！！
！何処の誰とだって、戦ってやる！！！！」

優星 side out

第2話 帰りたくても帰れない！？ 勇者iのフロニヤルド（後書き）

次回第3話 姫様奪還戦

あの2人がいよいよ登場！？

第3話 姫様奪還戦（前書き）

ノワール「ビスコッティに突如現れた勇者優星」

ベール「でも元の世界に帰れなくて困ってるのか」

ジョーヌ「ま、うちらには関係あらへんけどな」

ノワール「なので我らジェノワーズは空気読まずに姫様を誘拐」

ベール「宣戦布告、しちゃいました!」

?「さーて、俺様の出番だぜ!」

ジェノワーズ「ガウ様いえーい!」

第3話 姫様奪還戦

3人称 side

《さあ！昼間の戦の熱気の冷まならないうちにやら大変な事になつてまいりました！！》

ガレット国営放送の報道員フランボワーズ・シャルレーの実況と共にビスコッティの城下町に映されている映像にジェノワーズと優星の姿が映る

フランボワーズ《なんと、ビスコッティの代表にして姫君、ミルフィオーレ姫が攫われるという大変な事態！！！！》

フランボワーズは2体のセルクルが引つ張る台車に乗って移動し続ける

《私、臨時実況のフランボワーズ・シャルレーもただいま大急ぎで現地に移動しております！！》

優星「はあ……はあ……はあ……」

場内を走り、誰かに合流しようとしている優星

優星「あ、エクレール！ちょうどいい所に。大変なんだ、姫様が攫われちゃって……だから今すぐ助けに……」

此方に走ってくるエクレールに言う優星

しかし

エクレール「この……ド阿呆がああああ……!!!!」

エクレールは飛び蹴りで優星の顔を蹴り、優星をふっ飛ばした

優星「へぶっ!？」

優星は近くの石柱に吹っ飛び激突する

優星「いたた……って何すんの!？」

エクレール「それはこっちのセリフだこのド阿呆！！勝手に宣戦布告を受けてどういっつもりだ！？」

優星「……………はい？」

エクレールの言葉に訳が分からなくなっている優星だった

場所が変わってコンサート会場

準備をしつつもざわめきが収まらない中、舞台裏でロランとアメリカが話していた

ロラン「すまないアメリカ、私が勇者殿に宣戦布告の仕組みを教えていなかった」

アメリカ「そうでしたか……………」

アメリカは沈んだ表情でロランに伝える

ロラン「まあ、その……大丈夫だ。姫様は我々が取り返す！」

アメリタ「でも……間に合うでしょうか。姫様の歌を楽しみにしている人々を、悲しませるわけにはまいりませんし……」

ロラン「だ、大丈夫だ！勇者殿とエクレールがもう向かっているし、私も兵を整えて急いで出る！」

その時、2人がいる所に1匹の犬が走ってきた

ロラン・アメリタ「!?」

犬が首に巻いているスカーフには1つの巻物が入っていた

ロラン「お前は……ホムラ？」

エクレール「宣戦布告を受ければ、公式の戦と認めた事になる。普段の戦闘ならいざ知らず……よりによって姫様をあまつさえこんなタイミングで……！」

セルクルに乗りながらミオン砦に向かう3つの影

それは優星、エクレール、リコッタであった

エクレール「コンサートの姫様の出番まで、あと一刻半しか無いんだぞ!?!?!?聞いてるのか、勇者?」

優星「あ、うん!!」

蒼色のセルクルの背中で上手く乗ろうと思惑錯誤している優星

優星「大丈夫、全部聞いているから!!」

エクレール「大体貴様は何でまともにセルクルにも乗れんだ!?!」

優星「いや……僕の世界にはいなかったし……」

リコッタ「エクレ、あんまり怒ると血管切れるでありますよ?」

ピンク色のセルクルに乗っているリコッタがエクレをなだめる

エクレール「ふん！」

3人が通り過ぎた道の傍の崖の上からそれを見る人影があった

？「うん・・・」

その恰好はさながら旅をしている侍のようであった

？？「親方様ー！」

その後ろから似たような格好をしたもう1つの人影が小走りで駆け寄ってくる

？？「何か面白いものでもございましたかー？」

その人影の被っている烏帽子の両端から金色の髪がちらつく

？「おーユキカゼ、どうやら戦のようですね」

ミオン砦

門前にはそこにはガレット獅子団の兵士達数百人が各々の武器を持つて待機していた

？「いやぁーガウル殿下にこのゴドウィン光栄でありますぞ」

玉座らしき椅子に座っている銀色の髪的少年に膝まづいている１人の男

ガウル「うはははは！ーいやぁ、お前も今日の戦じゃ暴れ足りないと思つてよ」

ゴドウィン「いやぁまったく・・・砦攻めも悪くありませんが自分

はやっぱり野戦が得意でございますので・・・」

ガウル「おう！ー！がつつり暴れてくれよ？お？まあお前も飲め！ー！」

持っていたグラスの飲み物が切れたのを見計らってゴドウィンにも飲み物を進めるガウル

ゴドウィン「はっ！では、遠慮なく・・・」

傍に来ていたメイドからグラスを受け取るゴドウィン

ゴドウィン「おお、そう言えばミルヒオーレ姫は今、は・・・？」

ガウル「あぐ・・・うむ・・・ルージユに任せてあるよ、接待体制は万全さ」

ゴドウィン「あぁなるほど・・・」

―ミオン砦門前

待機している兵士達が何かを見つける

一本道の先、砂煙と共に何かが走ってくる音

エクレール「本体を待ちたいが、待ってる時間は無い!!」

優星「うん!」

エクレールは左手に短剣を、優星は右手にエクスではなくパラディオンを握っている

エクレール「ガウル殿下の兵士達は精鋭だ、野戦であの数を相手にするのは厳しい」

優星「分かってる・・・」

エクレール「だが、かつての戦では・・・1000を超える騎兵隊を乗り越え、見事に一騎掛けで敵将までたどり着いた伝説の騎士だつて存在した!」

優星「す、凄い……………」

エクレール「それを思えば我々とて、100騎やそこらの相手など・
・・」

優星「そうだね……リコのサポートもある」

2人は同時に自分の武器を構える

優星・エクレール「やってられな事もない……！」

「垂れ耳隊長と勇者、一直線でやってきます！」

「隊長……！」

隊長「よおーし……弓兵……！いつちまえー……！」

「……おお……！……！」

隊長の言葉に弓を構える弓兵

―ポーンポーン！――！

隊長「あ！？」

隊長が空を見上げると幾つもの砲弾が自分達をめがけて飛んできていた

「「「うわああああああ！？」」「」」

それが着弾し、兵士たちが一気にけものだまに変わる

隊長「・・・・・・・・」

「砲撃、砲撃――！！」

唖然のする隊長を無視して2人は砦の扉をぶち破って中に突入していった

リコッタ「ふふふであります・・・」

ミオン砦近くの森林、そこでリコッタは自身の紋章砲で幾つもの砲弾を準備していた

リコッタ「ビスコッティ学術研究院主席、リコッタ・エルマール！
！戦場では、砲術師をやらせて頂いてるであります」

その言葉と共に、再び砲弾がガレットの兵士たちに降り注いだ

？「はっはっはっはっは！！これは凄い」

ミオン砦を崖の上から見る2人の人影

？「暗がりだ誰が誰やら分かんが・・・若い騎士達が頑張ってる

でいるようでご覧な。」

ユキカゼ「ですが親方様、ビスコッティとガレットの戦のようですから我々も加勢をするべきなのは……。」

ユキカゼが不安そうに言う

？「若者同士、楽しく戦をしているのでござろう。大人が邪魔をするのも無粋でござるよ。」

そういつてとつくりと杯を取り出し、戦を見る

？「拙者はゆっくり、見物をさせて頂くでござる。」

場所は再びコンサート会場舞台裏

ロラン「すまないホムラ、この手紙をお前の主に届けてくれ。大急ぎでだ!!」

ホムラ「あん!!」

ホムラは鳴いて応えると駆け足で走っていった

ゴドウィン「ふははははは!!!!勇者に親衛隊長、この数・・・
打ち勝てるかな!？」

高らかに言うゴドウィン

砦内に入った優星とエクレールは苦戦を強いられ、壁際に追い込まれてしまっていた

優星「くっ・・・」

エクレール「ちい・・・」

コンサート開始まで、残り40分

三人称

s i d e
o u t

第3話 姫様奪還戦（後書き）

すみません、対ガウル戦まで書く事が出来ませんでした・・・

？「おい！？しっかりしてくれよ！？」

ごめんね、次回はきっちりと戦闘させてあげるから

？「ま、勇者と戦えれば俺はそれでいいけどさ！」

次回、「激闘、ミオン砦！」

？「俺の活躍、見てくれよ？」

第4話 激闘、ミオン砦！（前書き）

エクレール side

アホの勇者のせいで始まった発生した我らが姫様の奪還戦

砦での戦いはゴドウィン將軍とあの方、．．やりこ達も入り混じってでの大乱戦

私はこいつ等の相手をする！！

勇者、さっさと姫様を助けてこい！！！！

第4話 激闘、ミオン砦！

優星 side

数分前・・・

優星「エクレール、ここは僕が引き受けるから姫様を・・・」

エクレール「勇者、ここは私が受け持つ。だから姫様を助けに・・・」

兵士達ににじり寄られながら同時に言う僕とエクレール

優星「僕が！！」

エクレール「私が！！！！」

ゴドウィン「ええい！！！！おしゃべりは此処まで——」

ゴドウィンがその手に持つ鉄球を僕達に投げようとする

その時

―ガキイイイイン!!!

何処からか飛んできた矢によって鎖が別の方向に誘導され鉄球は壁にぶつかった

ゴドウィン「なっ……」

？「ふむ……なにやら大変そうでござるなあ」

声が聞こえ、そちらを向くと城壁の上に烏帽子を被った女性が立っていた

エクレール「あ、あなたは……！」

優星「エクレー？」

ゴドウィン「何奴だあ!？」

？「拙者はビスコッティ騎士団所属の騎士。ブリオツシュ・ダルキ

アンでござるよ」

その手に持つ大太刀を片手で持ち、城壁から降りるダルキアン

ゴドウィン「ダルキアンだと・・・」

エクレール「ダルキアン卿!!」

ダルキアン「おおエクレール、久方ぶりじゃのお。それに勇者殿も、お初にお見えにかかる」

優星「あ、はい。津川優星です」

ダルキアン「うむ。勇者殿にエクレール。ここは拙者とユキカゼが受け持つでござるよ」

エクレール「ユキですか!？」

ダルキアン「今頃は、リコもつれて此処にむかつてるでござるよ」

ダルキアンは大太刀をゴドウィンに構える

エクレール「いくぞ勇者!!」

優星「あ、うん!!その、有難うございます!!」

・ 僕とエクレールは兵士たちを片付けながら場内に向かっていった・

途中、姫様を連れ攫った3人組が現れ、エクレールがそいつらの相手をする事になった

僕はそのまま城の中を走り続け、1つの大きな部屋でセルクルに乗った銀色の髪の少年を見つけた

？「お、来たか勇者」

優星「姫様は何処だ!?!」

?「はっ、俺に勝てたら教えてやるよ!!!俺はガウル・ガレット・デ・ロワ。さあ、やろうぜ勇者あああ!!!」

優星「!!!」

セルクルで突進してくる敵ーガウルに僕は右手にエクスを出し、持っていたパラディオンを左手に持ち替えて応戦し始めた

ーガキイイイイン!!

剣と槍がぶつかり合う金属音が部屋に響く

優星「くっ・・・」

ガウル「へへっ」

交戦を始めてから数分、既にガウルはセルクルから降りて自分の足で僕と戦っている

優星「姫様は・・・・・・・・帰して貰うよ!!!!」

ガウル「はっ、やれるもんならな!」

優星・ガウル「うおおおおお!!!!!!」

両手剣と槍が再びぶつかり、鏢迫り合いの状態になる

―ガキイン!!ガアアンツ!!!

剣と槍は当たり、金属音が止まず戦いは続く

ガウル「へへっ・・・・・・・・おっ?」

ガウルが使っていた槍の柄が折れ、使えなくなる

優星「……………あ」

対する優星の左手にあったパラディオンも刃が折れ使えなくなる

ガウル「いいねえ……充分客を呼べる腕前だ」

ガウルは壊れた槍を後ろに投げ捨てる

ガウル「だが、もうちょっと派手な技が欲しいところだな」

ガウルは優星に素手で構えながら言う

ガウル「俺らの戦は見してなんぼの代物だ」

その瞬間、ガウルの背中に紋章が浮き上がる

優星「……………!!」

ガウル「強さと華麗さ、豪快さ。その辺が騎士と兵士の必須事項！その為の力が、この気力だ！！」

両手に付けている籠手にも紋章が浮かび、両手両足から紋章の色――青緑と同じ色の恐竜のような爪が現れる

優星「これ・・・は！？」

ガウル「気力開放！獅子王蒼牙ああ！！！」

ガウルは飛びあがり、上から僕に向かってくる

優星「！！」

右手のエクスを構え、ガードの体勢に入る

ガウル「へへっ！！」

右足が刃に当たり、後ろに押される

ガウル「どりゃあああああ！！！！」

右手、左足、左手、右足

ランダムでガウルは僕に攻撃してくるが何とかエクス之刃で受け止める

しかし、喰らうたびに後ろに押されていく

ガウル「天雷！！！」

気力の塊が放たれ、僕は中に浮く

ガウルは地面から飛び上がり僕に向かってくる

優星「くう！？」

すれ違いざまにまたエクスで護るが空中での衝撃に怯む

ガウル「爆砕じiiiiiiiiん！！！！」

一度天井に両手で掴まり、勢いをつけなおして僕に突撃してくる

左足を刃で受け止めるがそのまま勢いで地面をえぐりながら着き進められ壁に激突した

ガウル「ぐおお・・・」

壁に自身も激突し、目を押さえるガウル

ガウル「うはははははははははは！！！！どうよ！？獅子王蒼牙からの天雷爆砕刃！！街じゃ噂の気力系必殺技だ。ふっ・・・終わったな」

ガウルはあごに手を当てて勝利を確信する

——どっごおおおおおん！！！！

ガウル「うえっ！？」

横の壁と瓦礫が吹き飛び、驚くガウル

優星「はぁ・・・はぁ・・・勝手に、終わらせるな!!」

優星は息が切れながらもガウルに言う

ガウル「あ、あれええええ!!? いや、今は普通に終わりだろ!!?」

優星の周りを歩きながら服装を見るガウル

優星の服装は汚れこそ着いているものの破れてなどはいなかった

ガウル「な、何で立ってんだてめえ? 化け物が、化け物なのか!?!」

優星「くっ・・・」

しかし、優星の脳天から血が流れ顔に垂れてくる

ガウル「お!?!」

優星・ガウル（やっぱり効いてたあああ！？）

優星「いたた………」

ガウル「だああ！？馬鹿！！怪我してんじゃねえか！！異世界人はけものだまになれねえんだからあんまり無理な耐え方すんなよ？」

優星「余計な心配はいらないよ、それに……なんとなく分かった」

ガウル「……へ？」

優星「気力の使い方……！！」

優星がそう言うのと優星の背中に蒼い紋章が浮かび右手に持っているエクス之刃が光り始める

ガウル「……」

ガウルはそれを見て無言で構える

優星「急がないと………」

刃は光るだけじゃなく、更に薄く、細く伸びる

その剣の姿は優星の「蒼刃蒼牙」と酷似していた

優星「コンサートに間に合わない、みんなが姫様の歌を待ってるんだ!!」

ガウル「へ!? コ、コンサート!？」

優星「はあああああ!!!!」

ガウルにエクスを構えながら斬り込む優星

ガウル「うおおおお!!? ま、待て待て勇者!! コンサートって!？」

ガウルはいつの間にか持っていた剣でエクスを止める

しかし、優星の剣の重さに押され始める

優星「だああありやあああ！！！！」

ガウル「！？」

2人がいる足場はひび割れ、小さいクレーターが出来上がった

砦の広場

ダルキアンとゴドウィンは対峙していた

しかし、ゴドウィンは焦りの表情を見せていた

ユキカゼ「親方様ー！大変でございますー！！」

ゴドウィン「むう！？」

城壁の上からユキカゼがダルキアンに言う

その傍ではリコッタが望遠鏡で外を見ていた

ユキカゼ「敵増援が参ります!!」

ダルキアン「数は」

リコ「それが・・・一騎のみなのであります!」

ミオン砦に近づく砂煙の正体―レオンミシエリは愛騎のセルクルを
全力で走らせていた

リコッタ「レオ姫様が、一騎掛けでいらしているのであります!」

レオンミシエリ「正門、あけえええい!!!!」

「あ、ははー!!」

正門担当の兵士はレオンミシエリの言葉通り門を開ける

ゴドウィン「閣下!!」

ゴドウィンが広場に入ってきたレオンミシエリに跪く

ダルキアン「これはレオ姫、ご無沙汰でござる」

レオンミシエリ「久しいのおダルキアン卿、じゃが姫とは呼ぶな。
今は領主じゃ」

ダルキアン「これは失礼を・・・」

ダルキアンは素直にレオンミシエリに頭を下げる

ゴドウィン「か、閣下・・・これはそのお・・・」

レオンミシエリ「そこをどけダルキアン」

レオンミシエリはゴドウィンの言葉を聞かず、セルクルから降りる

レオンミシエリ「わしはガウルに話がある」

ダルキアン「申し訳ございませぬ。ここは戦場、そして拙者は若者たちの殿を務めさせて戴いておりますれば……」

レオンミシエリ「押して……通れと」

ダルキアン「御意」

レオンミシエリはエメラルドグリーンの紋章を手の甲に出現させ、持っていた武器―斧に氣力を付加させる

レオンミシエリ「わしを以前のわしと思うなよ？ もはや……貴様が相手でも引けを取らぬ……」

ダルキアン「お相手仕るでござる」

ダルキアンも手の甲に紫の紋章を出現させ、大太刀に氣力を付加させる

そして、両者同時に踏み込み太刀と斧がぶつかった

ダルキアン「ふっ！！」

レオンミシエリ「！！」

斬りかかつては弾き、振りかかれれば止められる

それを繰り返し対峙する2人

ダルキアン「ときにレオ様。我が国に侵略を繰り返されているそう
でござるが」

レオンミシエリ「それがどうした・・・！平時通りの我らがレット
の戦興業じゃ」

ダルキアン「レオ様の侵攻に、我が国の真面目な騎士団長が頭を悩

ませているでござる。うちの姫様のコンサート興業や一般の事も・
」

レオンミシエリ「それがどうした!!」

ダルキアン「いやあ、なかなか楽しいものばかりでござるが」

2人は同時に離れるが構えを解かず睨みあう

レオンミシエリ「楽しくないとは言っておらん」

レオンミシエリはそう言うのと、左手に付けていた盾を外す

レオンミシエリ「それだけでは済まぬ事もあると言っておる!」

ダルキアン「まあうちの姫様にも、至らぬ点はありましようが・・・
年と経験を重ねれば今よりもっと立派な領主になっていけると家
臣一同信じております。それで、どうか今暫くは・・・!」

そう言ってレオンミシエリの顔を見たダルキアンは驚いた表情にな
った

何故なら、レオンミシエリの表情は寂しげな表情だったからだ

レオンミシエリ「それが・・・そう出来れば、どれだけ・・・！」

ダルキアン「レオ姫・・・」

レオンミシエリ「くっ・・・お喋りは此処までじゃ！！誰に何を言われようと、わしはわしの道を行く！！」

紋章を強く出現あつせ、ダルキアンに突っ込むレオンミシエリ

ダルキアン「！！」

大太刀で斧を受け止めるが刃が折れ無防備になる

そこをレオンミシエリが一閃し、ダルキアンは壁に吹き飛ばされて来ていた服が破けた

レオンミシエリ「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ダルキアン「うむ、お見事。降参にござる」

ダルキアンは白旗を出し降参する

レオンミシエリ「……………来い、ゴドウィン」

ゴドウィン「は、はー！ー！ー！」

城の中に歩いていくレオンミシエリをゴドウィンは追って行った

ガウル「ってか、この後コンサートってマジか、マジなのか!?!」

優星「だからそう言ってんじゃないか!?!」

ガウル「こんのお……………!ジェノワーズのアホどもが……………また適

当な仕事しやがったなあ・・・」

優星「何をごちゃごちゃと・・・」

その時、奥の壁が破壊され砂煙が怒った

優星・ガウル「へ？」

そこには、でかいたんこぶをつけ気絶しているジェノワーズを持っているレオンミシエリが立っていた

レオンミシエリ「ガウル・・・それにビスコッティの勇者・・・」

ガウル「姉上!？」

レオンミシエリ「はー・・・・・・・・ガキ共おおお!!!!!! 戦場で何を遊んでおるかあああああ!!!!!!」

レオンミシエリの放った言葉は砂煙を吹き飛ばすほど迫力があつた

優星・ガウル「は、はいいいい!!!!!! ごめんなさいいいいい!!!!!!」

その瞬間2人同時に、綺麗に謝っていた

？「レオ様申し訳ございません、こんな事とはつゆ知らず・・・」

ガウルに使えるメイド、ルージュが城内を歩くレオンミシエリに謝る

レオンミシエリ「よい、悪いのはその馬鹿2匹じゃ」

優星・ガウル「うう・・・」

レオンミシエリの後ろを歩く2人の頭にはジェノワーズと同じ大き

さのたんこぶがついていた

レオンミシエリ「邪魔するぞ」

レオンミシエリはある部屋の扉の前でそう言つとすぐに扉を開ける

ミルヒ「レオ様！！sの、御無沙汰して」

レオンミシエリ「すまなんだなミルヒオーレ姫殿下、戦勝国の宴の邪魔など・・・お主の都合を無視して連れ出した弟のひりょうを詫びよう・・・」

ガウル「あう・・・・・・・・・・」

ミルヒ「いえ！！あの、ガウル殿下は御存じなくて・・・」

レオンミシエリはミルヒの横を通り過ぎ、奥の椅子の前に立つ

レオンミシエリ「今回の詫びは、何か別の形で考える。今は早く戻ると良からう」

ミルヒ「レオ様・・・」

淡々と告げるレオンミシエリの対応に寂しさを感じるミルヒ

レオンミシエリ「ルージュ、後は頼んだ」

ルージュ「は、はい」

レオンミシエリは別の扉から立ち去ろうとする

優星はそれを見ていたが、レオンミシエリの横顔がちらつと見えた

優星（レオンミシエリ閣下・・・？）

優星が見たレオンミシエリの表情はどこか寂しそうで、過去のフェイトの顔を思い出させた

優星（あなたは・・・何か、抱えているんですか・・・？）

ガウル「あゝやっぱり間に合わねえか？」

エクレール「姫様の出番までは後20分、此処からホールまでは、
どう急いでも1時間は」

ガウル「ぬうおおおお！？なんてこつたなんてこつたああああ
！？」

ミルヒ「あの、本当にお気になさらず・・・」

ガウル「つつてもよぉ・・・」

ミルヒ「あ・・・」

ふと、ミルヒは壁に背を預けている優星に視線を向けた

優星「・・・あ」

視線に築いた僕は姫様の顔を見る

ミルヒ「・・・」

姫様は心配しないでくださいと読み取れる表情をしていた

優星「・・・エクス、準備はいい？」

エクス「はい、マスター」

それを見た優星はエクスと念話で話し、ある事を決めた

優星「姫さま、僕が送っていきます」

ミルヒ「え？」

ガウル「送ってくつてお前・・・」

エクレール「どうやって・・・」

優星「もう戦は終わり、だったら・・・僕ので全速力で飛ぶ！！」

ガウル「へ・・・？」

僕は姫様をお姫様だっこで抱きかかえる

それを見ていたメイドさんが窓を開ける

優星「じゃあ、いきますよ姫様」

ミルヒ「は、はい!!」

僕は飛行魔法を使って浮き始める

ガウル「なあ……!!?」

エクレール「うい……た!?!」

優星「エクス!!」

エクス<S o n i c m o v e . >

そして、加速魔法を使って一気に部屋から飛び出した

優星 s i d e o u t

第4話 激闘、ミオン砦！（後書き）

優星 side

姫様も無事救出し、これでひとまず安心

でも、レオンミシエリ閣下が見せたあの寂しげな表情・・・

一体、何を・・・？

次回、第5話「水場での会合」

それは、1人の人物の救いになるのか・・・

第5話 水場での会合（前書き）

優星 s i d e

鮮烈だった今日一日

異世界での戦いは、今まで僕が体験したこともないもので

だれも傷つかず皆が楽しめる、そんな戦

けれど、僕の心は何処か落ち着かない――

あの人が見せた、寂しげな表情――

貴女は、何か抱えているんですか……？

第5話 水場での会合

ミルヒ side

勇者様のおかげでコンサートに間に合った私は急いで準備をします

本日の戦で頑張ってくださいった参加者の方々、戦を楽しみにしてくれていた方々

その人達の為にも、私は――

もちろん、勇者様にもお届けしないと

私には疲れていないように振舞って下さっていましたが、多分それは私に心配させないため

せめて、私の歌で少しでも安らぎを、疲れを拭きとばしてあげたいから――！

ミルヒ「今日の勝利を糧に、今日よりもっと素敵な明日を皆さんに贈れるように、頑張る勇気を乗せて歌います。」きつと恋をしている」「

私の思いを、気持ちに乗せて歌おう！！

ミルヒ s i d e o u t

優星 s i d e

姫様をコンサート会場に送り届けた後、僕は魔力切れで疲れていた
ので城内の草木の上で横になって夜空を見上げていた

すると、コンサートを放送している画面を伝って姫様の歌が聞こえ
始めた

エクス<良い歌ですね、マスター>

優星「うん、優しくて・・・綺麗な歌だ」

僕は目を閉じて姫様の歌に集中する

歌に合わせるように、そよ風が気持ちよく僕の身体を吹き抜けていく
それがとっても、心地よかった

姫様の歌声を聴きながら、僕はいつの間にか眠りに落ちていた・・・

優星「ん・・・」

ふと、僕は目を開ける

目に映った空はまだ暗いが、白い光が差し始めていた

優星「あのまま、寝ちゃったんだ・・・」

誰も僕を起こさなかったみたいで、僕はぐっすりと外で寝ていたよ
うだ

エクス<おはようございます、マスター>

ポケットにしまっていた待機状態のエクスが僕の前に浮いてきて言う

優星「うん、おはようエクス」

僕はエクスを右手で持つとそのまま城の外に歩いていく

エクス<今日はどうするのですか？>

優星「うん、そうだね・・・朝もまだ早いし、夜明けのフロニャル
ドの空の空気を、風を感じたいかな」

エクス<分かりました>

僕の希望に応えるようにエクスはバリアジャケットだけを展開してくれる

優星「ありがと、エクス」

僕はそのまま飛行魔法を使って空を飛び始めた

優星「風が、空気が綺麗だな・・・」

数十分程空を飛び続けて感じた事を口に出す

エクス「それはよかったです」

優星「うん・・・っと、少し喉乾いちゃったなあ・・・」

昨晚、戦が終わってから何も飲んで無かったので喉が渴き始めている僕

エクス<では、下の森林地帯で水場を探しますか？>

優星「お願いできる、エクス？」

エクス<勿論です>

優星「ありがとう」

僕はエクスにサーチを頼んで森に降りた

木々の間から登り始めた日差しが差していてとっても綺麗だった

エクス<マスター、そのまま50m程先に行くと川があります>

優星「本当？ありがとうエクス」

エクス<いえ>

エクスに言われた通り僕は歩いて行った

暫くすると、水の流れる音が聞こえてきた

優星「つと・・・あつた」

木々を抜けると、透き通った水が流れる小川がそこにあつた

僕は水際でしゃがんで水を手にすくって飲み始める

優星「ふう・・・水も美味しい」

ある程度喉が潤ったので立って周りを見渡す

耳を済ませると、水が落ちるような音が聞こえているのに気がついた

優星「滝かな？そこまで、大きくはなさそうだけど・・・」

僕は小川の上流に向かって歩いて行った

「クアー」

優星「あれは・・・」

暫く進むと1匹の黒いセルクルが小川の水を飲んでいるのを見つけた

「クア？クアー」

僕に気がついたセルクルは僕に頭を頼ずりしてくる

優星「つと、よしよし」

僕はセルクルの力に押されながらも頭を撫でる

優星「でも、このセルクルどこかで見たような・・・？」

辺りを見回すと、小さな滝の所で水を浴びている人影を見つけた

その人影は僕の気配に気がついたのか水を浴びるのを止めて此方を向いた

？「む？貴様は犬姫が呼んだ勇者・・・」

レオンミシエリ「なんじゃ、要求が多いの。まあいい、分かった」

それから数分後、昨日と同じ服を着たレオンミシエリ閣下が僕の側に歩いてきた

レオンミシエリ「何故貴様が此処に？此処は一応ガレットの土地だぞ？」

優星「え？す、すみません・・・」

レオンミシエリ「まあいい、わしも貴様に用があつたのでな」

優星「用、ですか・・・？」

レオンミシエリの言葉に疑問を持つ優星

レオンミシエリ「うむ、貴様の本気とやらを見たい」

優星「本気・・・？それなら昨日のがそうですが・・・」

レオンミシエリ「あれはあくまで大陸協定に則った戦じゃ。貴様は

全力をだしておらんのだろう?。」

優星「いえ、そんな事は」

レオンミシエリ「ガウルから聞いた。紋章術も使わずに貴様は犬姫をコンサートに間に合わせるように「飛んでいった」とな」

優星「……………」

レオンミシエリ「お主は異世界の人間、つまりわしらが持っている「特別な力」を持っているのではないか?」

優星「……鋭いですね、レオンミシエリ閣下」

レオンミシエリ「なに、わし程の者であれば直ぐに分かる。貴様がどれほど強いのかもな」

優星「それで……僕と手合わせしたいと?」

レオンミシエリ「そうじゃ」

優星「・・・分かりました」

優星はそう言ってレオンミシエリから離れる

優星「エクス、S e t u p」

エクス<O K ・ S t a n d b y r e a d y ・>

右手に待機状態のエクスを出すと、一瞬でエクスは剣に変わった

レオンミシエリ「ほう・・・昨日とは全く違うな、貴様から出ていく
る覇気そのものが」

優星「そうですか・・・」

優星が剣を構えると剣の刃が蒼い光に覆われていく

レオンミシエリ「わしも、手加減はせんぞ!!」

レオンミシエリは背中と右手の甲に紋章を出現させ、同じく鞘から
抜いていた剣を構える

優星「……………」

レオンミシエリ「……………」

お互い、何かを待つようにじっと動かない

「クアーーーー!!」

レオンミシエリのセルクルが鳴くと同時に、2人は動いた

レオンミシエリ「はあああああああ!!!!!!」

レオンミシエリはそのまま全力で優星に斬りかかる

優星「蒼波……一閃!!」

しかし、優星はレオンミシエリの斬撃をすれすれで避けながらレオンミシエリを剣で一閃した

レオンミシエリ「まさか・・・わしの斬撃が見破られるとわな」

仰向けに地面に倒れたレオンミシエリが優星に言う

優星「速さだけは自信がありますから」

優星はエクスを待機状態に戻すと倒れているレオンミシエリに手を差し伸べる

レオンミシエリ「すまぬ・・・」

レオンミシエリは優星の手を取って立ちあがった

優星「しかし凄いですねレオンミシエリ閣下、僕が避けれるか分からないくらい早い斬撃を放てるなんて」

レオンミシエリ「じゃが、貴様はそれを避けた。わしもまだまだじや・・・これでは――」

レオンミシエリは一瞬だけ表情を暗くする

優星「・・・何か、あるんですか？」

レオンミシエリ「貴様には関係のない事じゃ、気にするな」

レオンミシエリはそう言ってセルクルの元に向かおうとする

優星「・・・僕は」

レオンミシエリは優星の漏らした言葉に足を止める

優星「昔、ある少女を助けたいと思いました。その子は、笑っていても瞳は寂しそうで・・・何かを抱え込んでいるようでした」

レオンミシエリ「・・・・・・・・」

優星「今のあなたは、その子に似ています・・・辛くて、寂しくて・・・自分だけが何かを抱えてる・・・」

レオンミシエリ「・・・それがどうした？」

優星「他人に離せないならそれで構いません・・・でも、僕は」

優星はまだ背を向けているレオンミシエリに一歩足を近づける

優星「あなたをほおっておく事が、出来ません！このままでは、あなたは――」

レオンミシエリ「貴様に何が分かる――！！」

突然、レオンミシエリが大声で叫ぶ

レオンミシエリ「わしが――！わしがどのような思いでいるか――！どんなに辛い覚悟でいるか――！貴様にそれが分かるとでも言うのか――！！」

優星「分かりません……でも――！事情を知らなくても、それがどんなに辛いことだとしても……僕は、あなたの手助けをしたいと思っています」

レオンミシエリ「……………」

優星「あなたに何かが起きるとするなら、僕があなたの剣となって、必ず守ります――！！」

レオンミシエリ「っ!」

優星「僕が言いたいのはそれだけです……レオンミシエリ閣下」

僕はそう言って飛行魔法を準備する

レオンミシエリ「……本当に」

優星「……?」

レオンミシエリ「貴様は、本当にそうしたいのか? 出会ったばかりのわしを、自ら剣となって守るといつのか?」

優星「僕は、自分ができる事をしたい事をただやるだけです……あなたを守りたいのも、僕がしたいからするだけですよ」

レオンミシエリ「そうか……/ / /」

僕の言葉を聞いたレオンミシエリ閣下の頬は少しだけ赤みが差して

いるように見えた

優星「では・・・また、レオンミシエリ閣下」

僕はそのまま飛行魔法で城に戻っていった

優星 s i d e o u t

レオンミシエリ s i d e

やつの・・・あの言葉

優星『僕は、自分ができる事をしたい事をただやるだけです・・・』

あなたを守りたいのも、僕がしたいからするだけですよ』

何故じゃ・・・この言葉が、わしの心を何度も駆け巡っていく

そのたびに、わしの胸の鼓動が高まっていつている

レオンミシエリ「津川・・・優星」

奴の名前を口に出すと、自然と心が安らいでいく

じゃがこれは、あやつがわしにくれていた安らぎとは——何かが違う

奴は言っていた、わしの剣となり、わしを守ると

レオンミシエリ「そうじゃな・・・なら、貴様を犬姫から奪おうではないか」

わしは知りたい、この安らぎを——もっと、たくさん

レオンミシエリ「覚悟するんじゃない、勇者・・・わしを本気にしたら、無事では済まぬぞ?」

わしは誰もいない森で呟くとそのまま城に戻っていった

レオンミシエリ s i d e o u t

2人は気づいていなかった

いや、レオンミシエリはもともと気づくはずは無い

何故なら——それは小さいとはいえ、魔力反応だったのだから

2人が交差した場所に、小さな光——光球が出来ていた事に

第5話 水場での会合（後書き）

違和感なしに書いてたでしょうか・・・？

閣下ファンの方々に満足していただけているか心配です（汗）

次回もオリジナル話、お楽しみに！！！！

レオンミシエリ閣下が言いだした新たな戦

その内容は単純な戦闘

今までの砦攻めとは違う事に戸惑うミルヒ姫様達

勝利国1つだけ希望を敗戦国に申し出る事が出来る

ガレットが提示した内容は「勇者を1週間の間、ガレットで所有する」という内容だった・・・

って、僕が目的なの！？

次回、第6話「互いの目的の為に」

どうして——何で、君がこの世界に！？

第6話 互いの目的の為に（前書き）

優星 side

朝早く、いつの間にか来ていたガレットの領地内でのレオンミシエ
リ閣下との再開

彼女の願いで一槍だけ剣を交えて・・・

刃を交わし、その刃からは強く、寂しくて辛い思いが伝わってきて・
・

だから、僕は決めたんだ・・・

貴方に、何が起ころうと・・・僕が剣となって、貴方を守ってみせ
るって・・・！！

第6話 互いの目的の為に

優星 side

時間はもう朝を過ぎ昼に変わっていく頃

城に戻った僕は昨日の戦いでお世話になったあの人にお礼を言いに行っていた

優星「あ、あの」

ダルキアン「ん？勇者殿ではないか、どうかしたでござるか？」

城内から外に出ようとしていたダルキアンが、優星の声に気づいて振り返る

優星「その、昨日は有難うございました」

ダルキアン「ああ、礼はいらないでござるよ。若者たちの戦いに水を差したくは無かったでござるよ」

ダルキアンはそう言って優星を見る

優星「えっと・・・何か？」

ダルキアン「ふむ・・・勇者殿はなかなか剣技が強そうだと」

優星「いえ、そこまでは・・・」

ダルキアン「そうじゃ、勇者殿。風月庵に来るでござるか？」

優星「風月庵・・・？」

ダルキアン「あれが風月庵でござる」

ダルキアン卿に案内され、ビスコッティのある道を進んでいくと木々の中に立つ家が見えた

優星「へえ・・・緑に囲まれた、いい所ですね」

ダルキアン「そうでございますか」

入り口の門を通ると、縁側に座っていた金髪の少女が此方に小走りやってくる

？「御館様！！お帰りなさいでございますー！！」

ダルキアン「おおユキカゼ、ただいましてござる」

？「あ、勇者殿もいらっしゃいましてござる」

優星「あ、えつと・・・お邪魔します」

？「ユキカゼ・パネトーネでございますよ。ビスコッティ騎士団、隠密部隊所属でございまする」

優星「津川優星です」

ユキカゼの自己紹介に合わせ、自分も自己紹介する

ダルキアン「では勇者殿、拙者にその剣技を見せてもらえないでござろうか？」

優星「僕の、剣技ですか・・・？」

ダルキアン「うむ、軽く拙者と手合わせを合わせてで・・・」

ダルキアン卿はそう言つと優星とユキカゼから少し離れ大太刀を構える

優星「・・・分かりました、僕でよければ」

優星も指輪状態のパラディオンを剣状態で出現させ構える

ユキカゼ「御館様と勇者殿、どちらの剣技が上でござろう・・・」

ユキカゼは縁側に座りなおして2人を見ていた

ダルキアン「……………」

優星「……………」

両者は動かず、互いの出方を伺っている

―ドツ!!

優星が先に動き、左手に持つパラディオンでダルキアンに斬りかかる

―ガキン!!

ダルキアン「おお、なかなかの重さでござるなあ」

ダルキアンはそれを大太刀で軽く受け止めていた

優星「くっ……」

ダルキアンの大太刀からパラディオンを離し、別の角度から斬りかかる優星

―ガキイ！！

ダルキアンはそれを読んでいるかのように大太刀でガードしていく

ダルキアン「はあっ！！」

ダルキアンはパラディオンを刃から弾き、一瞬で優星に大太刀で斬りかかった

優星「！？」

それに反応した優星はパラディオンで大太刀をガードする

しかし

―ガキイイイイン！！！！

パラディオンはそのまま刃を折られ、2つに別れてしまった

優星「終わり・・・ですね」

ダルキアン「うむ、そのようござるな」

2人はそう言って構えを完全に止めた

ユキカゼ「流石御館様！！素晴らしい剣技でした！！」

ダルキアン「有難うでござる、ユキカゼ」

優星「流石ダルキアン卿ですね、エクレールが言っていた通りです」

ダルキアン「なに、拙者はまだまだ未熟故。これからも精進していくでござる」

優星（これだけ強いのに未熟って思ってるんだ）

ユキカゼ「御館様、今お茶を用意しますね！！勇者殿も座って待つてるでござる」

優星「あ、うん。お願いします」

その後、優星は2人と楽しくお話をして過ごしていた

優星「っと・・・そろそろ城に戻らないと」

ダルキアン「もうそんな時間か・・・勇者殿の話は面白くて時間の流れを忘れていたでござる」

ユキカゼ「はい。勇者殿、城に帰ったらエクレやりコ達に宜しく言っておいてほしいでござる」

優星「あ、うん。分かったよユッキー」

話している途中、ユキカゼに「拙者を呼ぶときはユッキーでいいでござるよ」と言われたのでそれが定着した優星

優星は縁側から立って、門に向かって歩いていく

優星「じゃあ、また来ますね」

ダルキアン「うむ、いつでもいいでござるよ」

僕は2人に手を振って城に向かって歩き始めた

優星 s i d e o u t

ユキカゼ s i d e

ユキカゼ「しかし勇者殿も、御館様には及びませんが腕が立っていいましたね」

ダルキアン「いや・・・勇者殿は力を押さえていたでござるよ」

ユキカゼ「え？」

あれで押さえていた・・・？御館様に完全に押されているように見えていたでござるが・・・

ダルキアン「あれはあくまで神剣を使つてでの戦い方・・・本来、勇者殿は別の得物を使っているはずでござるよ」

ユキカゼ「流石御館様です！！あれだけで見抜くなんて・・・」

自分はまったく気が付かなかったでござるよ

ダルキアン「うむ・・・いつか、お互いに本気で戦ってみたいでござるなあ・・・」

御館様は空を見上げながら言う

ダルキアン「そうじゃユキカゼ、お主も大胆でござるなあ」

ユキカゼ「なにがですか、御館様？」

ダルキアン「まだ合って2日目とはいえ、お主の愛称を男子の勇者殿に許すとは……」

ユキカゼ「ち、違うでござるよ御館様！！せ、拙者は単に勇者殿と仲良くしたいから許しただけであつて……／＼」

ダルキアンの言葉に、慌てるユキカゼ

ユキカゼ（でも……勇者殿といると、心が安らぐでござるよ……）

先程まで3人で楽しく話していた時、ユキカゼの心は何か暖かいものを感じていた

ユキカゼ（また、楽しく話したいでござるな。勇者殿、いや——
優星と）

ユキカゼは黒く染まりつつある空を見上げながらそう思っていた

ユキカゼ s i d e o u t

フエイト side

優星がいなくなってから数日が経った

みんなや母さん達が一生懸命探してるけど、優星はまだ見つからない
あの時の魔法陣からは、魔力反応をまったく感知出来ず手掛かりは
0に等しかった

フエイト「会いたいよ・・・優星」

私は今、本局の寄宿舎の自室でベッドの上で横になっている

優星が戻ってきてからも、仕事の関係で何日か会えない事はあった
でも、それは「優星は帰ってきた、だからいつでも会える」という
事が分かってたからそこまで寂しくは無かった

でも、今回は違う

何処にいるのかも、また会えるのかも分からない

フェイト「・・・ゆう、せい」

私は、あのカードをギュツと折れないように握りしめる

ふと、私の目から涙が零れカードに落ちる

―ポオ・・・

フェイト「・・・え？」

その時、カードがうつすらと光り始めた

金色と蒼色が混じったような色が、ぼんやりと光り続ける

フェイト「これ・・・は？」

光っていたカードの光は、やがてカードから離れ1つの小さな球体になる

球体にはうつすらとだが川と木々は映っていた

フェイト「……………」

フェイトはそれを見て球体に手を伸ばす

そして、フェイトの指が球体に触れた

――

部屋内が光りで埋め尽くされ、光が収まるとフェイトの姿が部屋から消えていた

フェイト side out

レオンミシエリ s i d e

あれから数日、わしはビスコッティに向けてある戦を申し立てた

戦の内容は単純な戦闘、競技の時間内に多くポイントを稼いだ方が勝ちという単純なもの

じゃが、勝った国には「1つ無条件で敗戦国に希望を申し出る事が出来る」という褒美をつけた

ビスコッティの犬姫もこれを了承し、今は戦が始まるのを待っている所じゃ

ガウル「姉上！！俺、勇者と決着つけに行きたいんだけど・・・」

レオンミシエリ「うむ・・・勇者を足止めしないと、此方も危ないしの・・・」

さて・・・ガウルを奴にぶつけている間に、差を開かせるか・・・？

わしはこの戦にどう勝つか思案していた

その時――

「閣下!! あやしい者をその森林で捕まえました!!」

レオンミシエリ「なに・・・?」

1人の兵士がわしに報告してきた

レオンミシエリ「ビスコッティの手の者か?」

「それが・・・」

レオンミシエリ「まあいい、此処に連れてこい」

「はっ!」

さて、一体どこのどいつじゃ?

レオンミシエリ side out

優星 s i d e

僕は戦の布陣の確認も兼ねて、戦場に作られた拠点でロラン騎士団長やミルヒ姫様達と話していた

ミルヒ「今回の戦・・・今まで皆攻めを行っていたレオ様が、こんな形の提案するなんて・・・」

ロラン「国民の人達としては、この上ない楽しい戦として受け取ってもらえてはいると思いますが」

エクレ「レオン閣下は、何を・・・」

ミルヒ「とはいえ、この戦に勝てばガレットに1つ希望を申し立てる事が出来ます。なら・・・私は、レオ様にお聞きする事があります」

ミルヒは椅子から立って僕達を見る

ミルヒ「此処数力月のレオ様の変わりよう・・・何か理由があるはずです。それを、必ず聞き出します！！その為に・・・皆、力を貸してもらえますか？」

エクレ「当然です！！姫様の願いであれば」

優星「はい、必ず・・・勝ってきます！」

僕とエクレールが姫様に言う

ミルヒ「有難うございます！！」

フランボワーズ《さあ！！戦開始まで残り3分を切りました！！両陣営の準備も整ったようです！！》

そこに戦を実況しているフランボワーズさんの声が入る

エクレ「いくぞ勇者、私達は前線で点数稼ぎだからな」

優星「うん、分かってるよ」

僕とエクレールはそう言って拠点から出て配置につく

フランボワーズ《さあ！！戦開始まで、5、4、3・・・》

ーピイイイイイ！！！！

戦開始の合図が鳴り響き、両国の兵士が一斉に動き始めた

エクレ「勇者！！最速で前線に向かうぞ！！」

優星「うん！！」

先に前線に配置されているビスコッティの兵士の手助けに急いで向かう優星とエクレール

しかし

―ドオオオオオン!!!!!!!!!!

エクレ「な、何だ!？」

先に見える前線の辺りから爆音と煙が舞っているのが見えた

優星「一体何が……?」

2人は走るスピードを上げて前線の位置までやってくる

そこには大量のけものだまになっている兵士たちが転がっていた

エクレ「これは……?」

比率的に言えば、いぬだまが9割、ねこだまが1割という圧倒的数差であった

フランボワーズ「なんとこの事だ!!! 僅か数分にしてビスコッテイ兵の前線メンバーのほとんどがけものだまに変わってしまったてい

る！！一体誰がやったのか！？》

—ざっ・・・

エクレ「っ！！」

まだ舞っている土煙の中を、2人に向かって歩いてくる人影が見えた

優星「・・・」

煙が晴れ、その人影がはっきりと目視出来るようになる

その姿は黒を主とした服、その上に白いマントのようなものを羽織っていた

その人物の顔は何故か仮面で隠れていたが、長い金色の髪がツインテールで整えられていた

その人物は右手に持っている剣をこちらに向ける

？「あなたが・・・ビスコッティの勇者、ですね」

優星「！？その、声・・・・・・・・」

間違えるはずがない声、しかしその仮面の人物は僕の動揺を無視して話を続ける

？「ガレット獅子団領領主、レオンミシエリ閣下の命令に従って・
・私があなた方を足止めさせて頂きます」

仮面の人物はそう言って持っている剣を構えた

エクレ「勇者、どうす——」

優星「エクレールは予定通りに行動して、この人は……僕が相手をする」

エクレ「なっ！？貴様本気で言っているのか！？こいつは——」

優星「いいから行って!!」

優星はエクレールの言葉を強く遮った

エクレ「……私は知らんぞ!」

エクレールはそう言って、残っているガレットの兵士たちを相手にしに行った

優星「エクレールを見逃すんだ・・・」

？「私の・・・私とレオンミシエリ閣下の目的は、初めから貴方だけだから・・・」

優星「・・・・・・・・」

優星は無言で左手にパラディオンを出現させ構える

？「そう言えば初めてだね・・・こうやって、本気で戦おうとするのは」

仮面の人物は何処か懐かしそうに言う

優星「どうして此処にいるかは今は聞かない・・・だって、今は敵同士だからね」

？「うん．．．私自身、嬉しいんだ。あなたの強さは、速さは私の目標だから」

優星「なら、僕の速さに．．．ついて来れるかな？」

？「ついていくよ．．．どんなに、速くても．．．あなたの隣で、いつも戦いたいから！！」

そして—— 2人は同時に飛びだして、剣を交えた

優星 s i d e o u t

第6話 互いの目的の為に（後書き）

—僕の速さは、強さは、僕の大切な人達を守るための剣

—私が望む強さ、速さは貴方の隣で一緒に戦うための力

—僕を、僕がいてくれる居場所を作ってくれている君達を守るため

—少しでも、貴方と一緒にいたいから

—その為なら、僕は——

—その為になら、私は——

「いくらだって、強くなって見せる——！」

次回、第7話「黒蒼と閃光」

2人の思いは、決して揺らぐ事のない強き絆

第7話 黒蒼と閃光（前書き）

― 守るための力と共に居たいがための力

― 2つの思いは譲れず、互いに競い合い成長していく

― 今は、それを全力でぶつけ合い・・・どちらが上かを決めるだけ
！！

― さあ、始めようか

「全力全開の・・・本気の勝負を！！！」

第7話 黒蒼と閃光

優星 side

同時に飛びだして、左手のパラディオンと向こうの右手の剣がぶつかる

？「はっ！！」

彼女は一度剣を離し、右足で蹴りを入れてくる

優星「甘いよ！！」

僕はそれを飛んで回避し、落下の威力も含めて剣で斬りかかる

？「当たらないよ・・・」

それを最低限の回避で避けられ、腹に一閃される

優星「くう・・・！！」

しかし

？「っ・・・」

彼女も身体をよろめかせ、バランスを整える

ーパキィ

彼女が付けている仮面の一部、左目の部分が壊れ紅い瞳が見える

？「流石だね・・・カウンターで私に一撃を入れてるなんて」

優星「そっちこそ・・・僕が見切れないくらい、速い斬撃を出せるようになってるなんてね・・・」

すると、仮面の人物は持っていた剣をしまいポケットから三角形の金色の宝石を取り出した

？「でも・・・私達の本気は、こっち・・・だよ」

その宝石が光ると、一瞬でそれは黒い斧に変わった

優星「・・・そう、だね」

僕もパラディオンを指輪に戻し、右手にエクスを出現させる

？「此処からが本当の勝負」

優星「僕の速さと思いを」

？「私の速さと思いを」

優星・？「全力でぶつける！！！」

エクス・？？<S o n i c m o v e . >

そして、その戦場には蒼と金色の光が交差し始めた

優星 s i d e o u t

エクレー ル side

あの馬鹿勇者・・・奴の力量が分からなかったのか！？

我が国の兵士たちを一掃できる程の力・・・

1人で、戦えるはずが・・・！！

フランボワーズ《な、なんと！！！！勇者とガレットの仮面の戦士の姿が、き・・・消えました！！》

エクレー「なっ・・・」

私の方角を見ると蒼い光と金色の光が高速で空と地を移動し続けているのが見えた

エクレー「あいつ・・・」

私は向かってくるガレットの兵士たちを倒しながらその戦いを見て

いた

エクレール side out

レオンミシエリ side

ほお・・・流石、勇者と同じ世界の者だけはあるな

奴と互角の戦いとは

ゴドウィン「閣下・・・あの女は一体・・・」

レオンミシエリ「奴はあの勇者の友人だそうだが、理由は知らんが勇者召喚とはまた別の形で、この世界にいつの間にか来ていたそうだが」

ゴドウィン「は、はあ・・・」

ガウル「うう・・・俺は」

隅っこでいじけているガウルの声が聞こえてくる

ノワール「ガウ様・・・」

ジョーヌ「よほど勇者と戦いたかったんやなあ」

ベール「まあ、次の機会にという事で諦めてもらわないと・・・」

ガウル「姉上の命令とはいえ・・・俺だって、俺だって・・・」

まあいい、あの馬鹿弟はほおっておこう

それよりも今は――

レオンミシエリ「む・・・？姿が、消えた？」

2人の姿が戦場から消え、代わりに蒼と金色の光が幾度となく交差するのが画面から見れた

レオンミシェリ「ほう・・・あれが奴の本気、面白い」

頼むぞ、貴様とわしの目的・・・その為にもな

レオンミシェリ side out

? side

あれから数十分、私と彼は幾度となくぶつかり合い、斬り合っていた

お互いの服は色々と切れ息も切れ始めていた

私が付けていた仮面も壊れかけ、今は左目の部分と口が完全に彼に見えている

優星「はあ・・・はあ・・・本当に、強くなってたんだね」

？「そっだよ・・・でも、まだ終わりじゃない」

優星「勿論・・・僕だってまだやれる！！！」

お互いに再び構える

でも――

？「戦の時間も長くは無い・・・これで、終わらせる！！」

??<Zunber form.>

私がつっていた斧は剣の柄だけになり、刃の部分には金色の刃が現れる

貴方に届くために…………私の、最大の一撃をぶつける！！

? side out

優星 s i d e

??<Zunber form.>

彼女の持っていた斧が金色の剣に変わった

そう、分かった………なら、僕も最大の一撃でいく!!

エクス<Stardast brade.>

純粋な剣と、魔力だけの一撃

「僕の新しい必殺技」・・・剣主体の収束剣技魔法!!

エクスの刃は蒼い光によって輝きだし、僕はエクスを彼女に対して
しっかりと構える

?「雷光一闪!!!!プラズマザンバー・・・」

彼女は持つ剣を背中に構えると、彼女の前に金色の魔法陣が現れ金色の球体が出る

優星「星の光よ、全てを切り裂く刃となれ・・・！！スターダスト・・・」

2人の最大の技が・・・今、放たれる！！！！

？「ブレイカアアアアアアアア！！！！！！！！」

優星「ブレエエドオオオオオ！！！！！！！！」

金色の剣によって打ち出された雷に、僕は突っ込んでエクスを振るう

そして、その場は爆音と共に舞い上がった砂煙によって見えなくなつた――

優星 s i d e o u t

ミルヒ side

みんなが楽しんで戦ってくれている

勇者様も、あの仮面の人と持てる力全てで戦ってくれている

フランボワーズ《な・・・な・・・な・・・！！金色の閃光と、蒼い斬撃！？それがぶつかって勇者と仮面の人物の姿が土煙に隠れてしまったああああ！！！！》

ミルヒ「！！！」

私はとっさに座っていた椅子から立ち上がってしまう

フランボワーズ《果たして！！2人は無事なのか！？》

ミルヒ「きつと・・・無事です。だって、彼は・・・ビスコッティの、勇者様なのですから」

だから・・・無事でいて下さい!!

ミルヒ side out

戦場に舞う土煙が次第に晴れ始める

うつすらと、2つの人影が重なっているのが見えてくる

優星「・・・・・・・・」

？「やっぱり、強いや・・・」

優星「うつん・・・君だって、強くなったよ・・・」

？「本当に・・・？私・・・届いたのかな・・・？あなたの、速さに・・・強さに」

優星「うん・・・」

ーピシッ・・・パキイイ！！

仮面の人物の仮面が次第にひび割れていく

？「ちよつと疲れちゃった・・・少し、眠る・・・ね・・・」

優星「うん・・・」

仮面の人物が優星の胸に顔をうずめる直前、つけている仮面が完全に壊れ素顔が晒された

？「すう・・・すう・・・」

優星「お疲れ・・・」「フェイト」

金色の髪、紅い瞳

フェイト・テストロッサ・ハラオウンの優しい寝顔が、そこにあった

優星「でも・・・僕も、限界・・・かな」

優星は背中から地面に倒れ、意識を遠のかせていった

優星「ん・・・」

優星は気が付き、目を開けると何処かの天井が見えた

優星「此処・・・は」

？「気が付いたでござるか、優星」

僕が寝ているベッドの傍に、ユツキーが立っていた

優星「ユツキー・・・？あれ、なんで僕は此処に・・・」

周りを良く見ると城内の僕の部屋だった

ユキカゼ「優星は先の戦で、一騎討ちで引き分けたでござるよ。それで、医療班が此処に運んだでござる」

優星「そう・・・だったんだ。じゃあ、戦の結果は・・・？」

ユキカゼ「うむ・・・戦終了と同時に点数の確認を行ったんじゃが・・・これが珍しく」

優星「・・・？」

ユキカゼ「点数はまったくの五分、引き分けでござったよ」

優星「引き分け・・・」

ユキカゼから結果を聞いた優星は少し落ちこんだ

優星「姫様の・・・期待には、応えられなかったか」

ユキカゼ「優星・・・」

優星「・・・あ、そうだ。ユッキー、僕が倒れてた時、一緒にいた人は・・・？」

ユキカゼ「うむ、彼女は一応ガレットの参加者となっていたでござるから、今はガレットにいるでござるよ」

優星「そっか・・・」

それを聞いた優星の顔は少し嬉しそうだった

ユキカゼ「むう・・・」

ユキカゼは何故か頬を膨らませて不満そうにしている

優星「ユ、ユッキー・・・？なんで不機嫌なの？」

ユキカゼ「拙者は不機嫌ではござらんよ」

そう言いながら背を向けるユキカゼ

優星「っと・・・」

優星は身体を少しふらつかせながらベッドから降りる

ユキカゼ「無理は禁物でござるよ?」

優星「大丈夫・・・すぐ直るから」

そう言つて優星は部屋から出て行つた

ユキカゼも優星の後ろに続いて歩く

ユキカゼ「優星は・・・あの女の人と、知り合いなのでござるか?」

優星「うん・・・彼女は、フェイトは・・・僕が護りたいと思つて
いる人だから」

ユキカゼ「そ、そうで・・・ござるか」

2人はそう言つて城の中を歩いて行つた

フェイト「……………」

城の一角、窓から遠くに見えるビスコッティの領地を見るフェイト

レオンミシエリ「なんじゃ、もう起きて平気なのか？」

フェイトが後ろを向くと、レオンミシエリが立っていた

フェイト「はい……有難うございます、レオンミシエリ閣下」

レオンミシエリ「なに……しかし、惜しかったの。戦は引き分け、わしの目的も、貴様の目的も無駄足じゃ……」

フェイト「すみません……私が、優星に勝てなかったから」

レオンミシェリ「まあいい・・・お主もゆつくりするがいい。戦を
していない日なら、ビスコッティに行ってもさほど問題はなかるう」

レオンミシェリはそう言って、自室に向かおうと後ろを向く

フェイト「・・・・・・・・」

フェイトは再び外を見つめていた

フェイト（優星がこの世界に来た理由・・・多分、優星はそれを終
わらせるまでは帰らない）

優星の性格を考えた上で、これからの事を決めていくフェイト

フェイト（だったら、私のすることは1つ・・・優星の、手伝いを・
・・・私が出る範囲でやるだけ）

フェイトが願うのは優星の隣にいる事

彼の隣で、いつまでも歩んでいく事

フェイト（だって私は・・・優星が、好きだから）

その思いの根は1つ「好きな人の隣にいたい」、ただそれだけ――

第7話 黒蒼と閃光（後書き）

わしの願いは1つ、あやつがくれた温もりを、安らぎを守る事――

じゃが、わしの星詠みは変わらず、さらに酷いものになっていく

――
なら、わしがする事はただ1つ・・・あやつを護るため、この星詠みを変える！！

例え、わしを犠牲にしてあやつを救えるのなら・・・わしは躊躇わん！！

次回、第8話「星詠みに課せられた運命」

――本当に・・・変えられるのか、この・・・運命を？

――決められた運命なんて、僕は認めない・・・運命は、人の手で、自分の手で切り開いていくものだから！！

番外編 七夕の夜に繋がる思い（前書き）

今回は7月7日―七夕という事で番外編です

7月7日

七夕と呼ばれるこの日は皆が各々の願いを、叶ってほしいと思う1日

平和が続くフロニヤルドの少女達も、自分の願いを――叶えたい
と強く願う

199

時系列は原作が終わり、1年と少しの時が流れた7月7日です

後半・・・閣下が、若干暴走？します

では・・・どうぞ!!

番外編 七夕の夜に繋がる思い

ミルヒ side

ミルヒ「~~~~~」

領主としての仕事をしながら曲を口ずさむミルヒ

アメリタ「姫様、今日は随分とご機嫌ですね」

ミルヒ「ええ！だって、久しぶりに優星が来てるんですから！！」

最近、仕事が忙しくてフロニヤルドに来ていなかった優星が久々に来ているためミルヒは上機嫌なのだ

アメリタ「そうですね・・・なら、お仕事を早く終わらせて優者様と過ごしましょうか」

ミルヒ「はい！-」

アメリカの言葉に笑顔で頷くミルヒであった

ミルヒ s i d e o u t

レオ s i d e

レオ「・・・なに、優星が来ているだど？」

バナード「はい、ロランがそうおっしゃってました」

何時ものように外交などの書類を見ていたわしにバナードがそう告げる

レオ「そうか・・・久々じゃの、奴が来るのも」

バナード「あちらでの仕事が忙しく、なかなか来れなかったようですから」

レオ「うむ・・・では、わしも顔を奴に見せるとするかの」

わしはビスコッティに向かう準備を始めた

レオ side out

エクレ side

エクレ「はあっ！！」

ーキーン！！

優星「ふっ!!」

―ガキン!!

フィリアンノ城の城内で優星と私は手合せをしている

エクレ「そこっ!!」

私は優星の右横腹に右手の短剣を振るう

優星「甘いよ!!」

―キン!!

優星はそれを左手の剣で止める

優星「はあっ!!!!」

そのまま優星は左手に持つパラディオンで私を斬った

エクレ「っっっ」

峰うちではあるもののダメージが入り、顔を歪ませる

ーチャキ・・・

優星「・・・」

エクレ「私の、負けだ・・・」

首と心臓の真上に剣先を当てられ、私は降参を認めた

エクレ「はぁ・・・まったく、貴様は強すぎではないか？」

優星「あはは・・・」

訓練場の傍らにある丸太の上に座って話す2人

優星「一応・・・9歳の頃から剣を振るってたからね・・・そこそこは自信があるよ」

エクレ「貴様でそこそなら私は点で駄目だな・・・」

半分冗談な感じでそう答える

優星「うつ・・・ごめんねエクレ」

優星はそう言っていると私の頭を撫で始めた

エクレ「なっ・・・なにをつ！？／／／」

優星「いいからいいから」

奴の撫でを口でしか抵抗できず、私は撫でられ続けた

エクレ（~~~~／／／）

それが恥ずかしく、私は顔を真っ赤にする

優星「……………」

それを見た優星は私の頭を引き寄せて、自分の膝の上に乗せた

エクレ「ななな……／／／／／」

優星「ほら、これで少し休んでなよ」

優星が笑顔で私を覗き込むように言う

エクレ（馬鹿者……そんな顔で言われたら、断れるか……／／／／／）

私はそれを受け入れ、暫くの間そうしていた

エクレ side out

ユキカゼ side

ユキカゼ「ん？そこで何をしてるでござるか優星？」

優星「あ、ユツキー」

拙者は城内の何処かにいる優星を探していたが、見つけたので声をかけた

優星は城の門の前にいて、何処かに行こうとしていた

優星「ちよつとね・・・笹の木を探しに行くんだ」

ユキカゼ「笹で・・・ござるか？」

優星「うん・・・僕の世界でのあるイベント行事の為にね」

そう言っつて優星は歩いて行つた

ユキカゼ「あ、拙者も付いて行くでござるよ」

歩いていく優星の後ろを拙者は小走りで追いかけて行つた

ユキカゼ「は～～～優星の世界では、そんなイベントがあるのでござるか」

優星「うん。それで、それをするために笹の枝が必要なんだ」

ビスコッティのある林の中で笹の木を探しながら話す2人

ユキカゼ「願いが叶うかもしれない・・・でござるかあ」

ユキカゼは途中で聞いた優星の説明を思い出す

ユキカゼ（拙者の願い・・・／／／）

ユキカゼの頬がほんの少し赤く染まったが、優星はそれに気が付いていなかった

優星「あ、あつたあつた」

優星がある木を見つけ、上を見ていた

ユキカゼ「優星、ある程度大きかったら大丈夫でござるか？」

優星「うん、大体2～2.5mあればいいかな？」

ユキカゼ「じゃあ、拙者が取ってくるでござるよ」

ユキカゼはそう言つて。一瞬で木の上に上った

ユキカゼ「うーん・・・この位で」

取り出した小刀で枝を斬るユキカゼ

ユキカゼ「よしっ・・・きやあ!？」

油断したのか足を滑らせて木から落ちるユキカゼ

優星「危ない!!!」

それを見ていた優星が落下地点に先回りして両手でユキカゼを抱きとめた

しかし

優星「うわっ!？」

落下の衝撃等により優星は体制を崩して背中から地面に倒れてしまった

ユキカゼ side out

優星「いたた・・・」

頭の後ろをさすりながら体を起こそうとする優星

ユキカゼ「た、助かったでござる優星・・・」

優星「うん、ユッキー・・・怪我は・・・」

ユキカゼ「あ……………」

2人の言葉が突然止まる

なぜなら、2人の顔と顔の距離は僅か数cmしか無いほど近かったからだ

ユキカゼ「……………」

優星「……………」

そのまま数秒間見つめあう2人

ユキカゼ「ん……………」

ユキカゼは頬を赤く染めて目を閉じる

優星「ゆ、ユツキー！？／／／」

それだけではなくユキカゼは自身の胸を優星の胸板にギュツと押し

付ける

ユキカゼ「優星・・・・・・・・」

ユキカゼは数cmしかない顔と顔の間を少しずつ近づけ始めた

優星「ユツ・・・キー」

優星は体を動かすことが出来ず、そのまま目を瞑り・・・・・・・・2
人の唇が

？「こんな所で何をしておるか、馬鹿者ども」

ーバシンツ！！！！

ユキカゼ「きゃうつ！？」

交わらなかった

1つの声と、何かを叩く音、ユキカゼのかわいい声が響き、ユキカゼは顔から優星の胸に沈んだ

優星「ユ、ユッキー!？」

?「まったく・・・貴様は、わしの物だというのにこやつは・・・」

優星「れ、レオン閣下!？」

そこには何時もの格好をしているレオンミシエリが黒いセルクルを横に立っていた

レオ「優星・・・わしの事はレオでよいと言ったじゃろつか」

優星「あ・・・ご、ごめんレオ」

レオ「うむ・・・しかし、久々に戻ってきたのはいいものの・・・随分とお楽しみだったようじゃの・・・?」

レオンミシエリは額に怒りマークを浮かべ優星に笑顔で言う

優星「あの・・・なんで、怒ってるの?」

レオ「別に怒ってはいないぞ？ただ・・・貴様はわしの物だというのに目移りしすぎしておるようじゃからのお・・・お仕置が必要じゃな」

その後、林から1つの悲鳴が聞こえたとか・・・

レオ side

まったく優星は！！何故わしだけを見てくれぬのじゃ！？

わしは、こんなにも貴様のことを思っているというのに・・・！！

優星「・・・そうだレオ。レオも七夕の短冊を書かない？」

レオ「短冊・・・？」

ユキカゼを背負って、フィリアンノ城に向かっていている優星がわしに言う

優星「僕の世界ではね、7月7日に笹の枝に1枚の紙を括り付けるイベントがあるんだ

レオ「ほう・・・」

優星「紙―短冊には、自分が願うことを1つだけ書くんだ・・・そうすると、願いが叶って幸せになれるっていうジンクスがあるんだ」

レオ「な、願いじゃとー!？」

優星「うん、どうk「もちろんやるとも!ー!」わ、分かった」

わしは大声で優星に言う

優星はそんなわしにちょっと驚いていた

ミルヒ「へえ・・・凄く、素敵なイベントですね!!」

ミルヒと2人、上階のテラスで七夕について話しながら過ごしている

ミルヒ「私の・・・叶えたい、願いかぁ・・・」

そう呟くミルヒはちらつと優星の方を見る

優星は闇に染まり始めているビスコッティの大地を見ていた

優星「・・・ミルヒ？」

ミルヒ「な、何でもないです!!!そ、そろそろ戻りましょう!!
!レオ様や皆を待たせてますし」

優星「うん」

慌てた口調で言うミルヒの対応に、普通に接する

その後、レオやユツキー達と楽しく夕食を過ごした・・・

優星「ふー……………」

大浴場の浴槽に浸かって、星空を見上げる

優星「ミルヒやレオ達と知り合って……もう、1年以上かぁ」

初めて召喚され、一度ミッドチルダに戻った後……再びフロニヤ
ルドに戻る

その繰り返しを何度か行っうちに、いつの間にか1年という時が
流れていた

―ヒタヒタ……

優星「・・・？」

お風呂場の床を歩く音が聞こえ、優星は視線を入り口の方に向ける
しかし、そこには誰もいなかった

優星「・・・気の、せいかな・・・？」

？「気のせいではないぞ」

声が聞こえると同時に、頭の後ろに柔らかい感触が当たり頭に手を
回される

優星「うわっ！？だ、誰！？」

？「わしじゃ」

回された手によって視界が狭くなるが、チラッとだけ銀色の髪が見
えた

優星「レ、レオ！？」

レオ「うむ」

優星に手を回し、身体を密着させている人物は、レオンミシエリだった

優星「ど、どうして此处に！？男湯だよ！！？ミルヒやユッキー達と一緒に女湯にいたんじゃない？」

レオ「あ奴らなど出しぬいてきたわ。こっちに来たのも、貴様と一緒に浸かりたいからじゃ」

レオは何の戸惑いもなく言い張る

レオ「それになんじゃ・・・？わしの胸の感触は嫌いか？」

そう言つてさらに僕の背中に胸を押しつけてくる

優星「い、今はそういう状況じゃないでしょ！？／＼／＼ほ、他の人が来たら――」

レオ「なに・・・入り口に清掃中の知らせを書いておいた。誰も来

ぬ
」

優星「なっ——」

レオ「駄目……か？」

後ろを向くと、寂しそうに……涙目で僕を見つめるレオの顔があった

優星「……今回、ただだよ」

レオ「……ああ」

僕とレオは、そのまま数十分ほど空を見上げ、浴槽から出た

優星「つと……レオはそっちでお願い、僕は反対側で着替えるから」

レオ「なんじゃつまらんの。わしはお前には身体を見られてもいいのじゃが」

優星「・・・冗談言わないで、とっとと着替える」

レオ「むう・・・」

頬を膨らませて、レオは服を着始めた

ミルヒ「えっと、優星。この紙に書けばいいんですか？」

優星「うん。多分、フロニヤルドの文字でも平気だと思うから」

ミルヒ「分かりました」

訓練場の一角に立てかけた笹の木の前で、各々が短冊の紙に願いを書いている

リコ「勇者様、自分もいいのでありますか？」

リコが首を傾げながら優星に尋ねる

優星「うん、リコも叶えたい願い位あるでしょ？女の子なんだからそれ位しないと」

リコ「あ、ありがとうございます・・・／／／」

リコはそう言って短冊に願いを書き始めた

数分後、全員願いを書き終えたので短冊を笹に括りつけた

ユキカゼ「願い・・・叶うといいでござるなあ」

エクレ「わ、私は別に・・・」

リコ「またまた、エクレもきっちり書いていたでありますよね？」

勇者様と――」

エクレ「い、言うな馬鹿者!!!!／／／」

3人はワイワイはしゃいでいる

レオ「ミルヒはなんて書いたんじゃ？」

ミルヒ「私ですか？私は――」

優星「ストップ。あまり他の人に話しちゃうと叶わなくなるよ？」

ミルヒ「わ、分かりました」

優星の注意に口を塞ぐミルヒ

優星「さて・・・時間も遅いし、今日はこれで解散だね」

ユキカゼ「もうそんな時間でござるか。お館様に心配をかけるでござるし、拙者は風月庵に戻るでござる」

優星「うん、また明日ねユッキー」

ユキカゼ「うん！では、姫様。レオンミシエリ閣下。お疲れ様でござる」

そう言ってユキカゼは立ち去っていった

ミルヒ「レオ様、私達も戻りましょうか」

レオ「うむ、そうじゃな」

今だ騒いでいるエクレとリコも3人につられて自室に戻っていった

優星「ふう・・・」

毎回、此方に来るときに使っている部屋のベッドで横になっている
既に電気は消しているが、窓から月光が差して部屋を照らしている

—きい・・・ボタン

優星「・・・誰？」

扉が開く音が聞こえ、僕は尋ねる

レオ「わしじゃ・・・」

優星「レオ・・・？どうしたの、こんな時間に」

先程別れてから既に2時間は過ぎ、時間も0時を越えている

そんな時間に、レオンミシエリは優星の部屋にやってきたのだ

レオ「なに・・・1つ、貴様としたい事があってな」

優星「したい・・・事？」

僕が首を傾げていると、レオが僕の身体の上に覆いかぶさった

両腕はレオの手によって手首を押さえられており、身動きが取れない状態だ

優星「レ、レオ!？」

レオ「優星・・・あの時の、わしの思いの返事・・・聞かせてくれぬかの？」

優星「あ、あの時のつて・・・・・・・・／／／」

数ヶ月前、フロニヤルドに訪れていた時に聞いたレオの気持ち

その時は、僕はまだ答えられず返事を先延ばしにしていた

レオ「やはり・・・フェイト達しか、貴様には受け入れてもらえぬのか？」

優星「そ、それは――」

僕とフェイト達の関係は、既に友人ではなく恋人という新しい関係になっている

それは、すでにレオだけではなくミルヒ達全員が知っている

レオ「わしは・・・諦める事が出来ぬ。貴様を・・・優星を好きという、この気持ちを・・・押さえておく事が」

優星「レオ・・・」

そう言うレオの表情は、何処か不安で・・・悲しそうな瞳だった

レオ「聞かせてくれぬか優星・・・わしでは、お前の隣にいるのは・・・無理なのか？」

声を震わせ・・・レオは僕に尋ねてくる

優星「・・・僕は」

僕は、ここ数力月の間に決めていた自分の思いを打ち明ける事にした

優星「僕が好きなのはフェイト達だ。それは決して変わらない・・・僕が帰れる居場所を、守ってくれている彼女たちの事が好きだ」

レオ「・・・・・・・・」

優星「でも・・・フロニヤルドに来て、レオ達と出会って・・・1年という時を過ごす中で、僕の中にある感情が出来始めてたんだ」

レオ「ある・・・感情？」

優星「うん・・・この国の人達と、出会った絆を・・・記憶を忘れたくない。特に・・・レオやユツキー、ミルヒにエクレ。リコ達と過ごして紡いだ絆を・・・記憶を、絶対に忘れたくないって思いを」

レオ「・・・・・・・・」

優星「その上で・・・気づいたんだ。僕は、君達を・・・降ろしていく事なんて出来ないって・・・一緒に、フェイト達と共に背負って行きたいって」

レオ「!!」

優星「でも・・・僕がいつ、フロニヤルドに来れなくなるか分からない・・・だから、戸惑ってたんだ・・・」

レオ「・・・・・・・・馬鹿者」

そう言つてレオは軽く僕の額を叩いた

優星「レオ・・・?」

レオ「例えそうなつても・・・わし達は巡り合えるではないか。ミルヒ達だって・・・同じ気持ちじゃと思うぞ」

優星「うん・・・」

僕がレオの言葉に頷くと、レオは笑つて

レオ「なら、背負つてもらつぞ?少なくともわしは、貴様と一生離れるつもりは無いからな?」

優星「勿論・・・そのつもりだよ」

夜遅く、2人の思いは確かに強まった

レオ「さて・・・ならもう、遠慮はいらぬな／＼」

優星「・・・へ？」

レオは頬を赤く染めて僕の手首を押さえる力を強める

優星「レ、レオ・・・？一体、何を・・・」

レオ「決まっておろう・・・わしを一生背負って行くんじやろう？
なら、今此処でそうなっても平気じゃ」

優星「いや・・・それは」

レオ「わしは・・・貴様が、好きなのじゃから」

レオは目を閉じて、僕に顔を近づけてくる

窓から指す月光が丁度レオの顔を照らすように差す

月光が差すレオの顔は、とても神秘的で・・・綺麗だった

僕はレオの行動を拒まず・・・そして

2人の唇が、確かに交わった

優星 s i d e o u t

番外編 七夕の夜に繋がる思い（後書き）

どうだったでしょうか・・・？

いやぁ・・・短く済ませようとしたらこんなにも長く（汗）

あ、今回はオマケありですよ

ーチュンチュン・・・

優星「ん・・・」

小鳥の鳴き声、太陽の陽が顔に差すのを感じた僕は目を開けて身体を起こそうとした

レオ「むにゃ・・・ゆう、せい・・・」

しかしそれは、僕の体に抱きついていてレオによって止められてし

まった

レオの恰好は上着がはだけ、胸が露わになっている

優星「／／／」

僕はシーツをレオに被せ、レオの拘束から抜け出す

僕はそのまま、寝ているレオを起こさないように部屋に置いている
本を読み始めた・・・

ああ、優星に対して読者の方々からのお怒りが来そうだww

さてさて・・・皆が短冊に何を書いたのか、此処ではあえて書きません

まあ、大体予想は出来ると思いますけど

では、今回は此処までにしておきます

ではでは

第8話 星詠みに課せられた運命（前書き）

フエイト side

姿を消した貴方と、異世界で再び再会できて

私の思いと、貴方の思いを全力でぶつけ・・・確かめ合って

絆は、さらに固く結ばれた

優星、私はついていくよ・・・いつだって、何処にだって!!

第8話 星詠みに課せられた運命

レオンミシエリ side

レオンミシエリ「何故じゃ!!」

ーバンッ!!

自室の鏡に映った映像と文字を見たレオンミシエリがテーブルを強く叩く

レオンミシエリ「何故・・・未来が変わらん!!!!」

唇を噛みしめ、鏡を睨むレオンミシエリ

鏡には赤い血を流し、倒れている2人の人物が映っていた

レオンミシエリ「このままでは・・・ミルヒに加え、あやつまで・・・!!」

鏡にはビスコッティの文字でこう書かれていた

―30日以内に、神剣エクセリードとパラディオンの所有者が死ぬ、と

レオンミシエリ「させんぞ・・・わしの、命に変わっても・・・!!ミルヒを、死なせたりなどさせるものか!!!!」

レオンミシエリ side out

エクレール side

エクレール「はっ!!はぁ!!」

私はいつも通り、城内の訓練場で訓練をしている

いや・・・今日はいつも以上に、だ

エクレール「昨日の奴の戦い・・・」

私が思い出すのは昨日の勇者と、ガレットの仮面の戦士の戦い
目に見えぬほどの素早い戦闘に、私は呆氣にとられていた

エクレール「あれが奴の本気・・・!!」

今の私では、全然駄目だ!!!

もっと・・・もっと強くならなければ!!

エクレール「姫様を・・・守るために!!」

私はより一層、集中して訓練を続けた

エクレール side out

優星 side

僕は今、ガレットに向かっている

勿論、フェイトと会う為だ

けれど・・・

優星「・・・駄目ですか？」

「当たり前だろ！！いくら勇者とはいえあんたはビスコッティの者だぞ！！ガレットの領地においてそれと入れるはずないだろ！！！」

ビスコッティとガレットの境界線にある門、そこでガレットの門番の人と話し合っていた

「とにかく！！さっき送った伝令の返信が来るまでは駄目だ！！！」

優星「・・・・・・・・」

門番の言葉に、ただ待つ事しか出来ない優星であった

数十分後

「・・・よし、通っていいぞ」

優星「・・・え？」

伝令を待つて数十分が経過した頃、門番の人が僕にそう言った

「はやく行け」

優星「は、はあ・・・」

僕は曖昧に答えながらも、此処まで乗ってきた蒼色のセルクルの背中に再び乗ってガレット領に入っていた

優星「・・・で、なんでこんな事になってるのかぁ・・・？」

エクス（私に言われても・・・（汗））

ガウル「勇者！！今日は負けねぞ！！！！」

ガレットの城に着いた途端、訓練場にいたガウルが僕に宣戦布告を申し立てて来た

最初は断ろうとしたけど、あまりにしつこかったので許可した

「ガウル殿下！！！！頑張ってください！！！！」

「ビスコッティの勇者なんて、殿下のお力でぶっ倒して下さい!!」

観戦するガレットの兵士達がそれぞれガウルにエールを送る

優星（まあ・・・まだ14歳みたいだし、子供っぽい所があっても普通か）

左手にパラディオンを握り、普段は使わない左腰につけている鞘にエクスを入れる

ガウル「なんだ、今日は1つなのか？」

対するガウルは両手に構えていた剣を少しだけ降ろして僕に問う

優星「たまにはこういう形で使いたくてね、さあ・・・・・・・・やろうか」

僕とガウルの距離は10m、互いに一步も動かず数秒が経過し・・・

ガウル「おらあああああ!!!」

先に、ガウルが地を蹴って僕に斬りかかってきた

優星「ふっ!!」

振り下ろされた右手を避ける優星

ガウル「はあ!!」

ガウルはすかさず左手の剣を振るう

―ガキン!!

優星はそれをパラディオンで受け止め、そのまま腕をふるってガウルを弾きとばす

ガウル「・・・へっ」

しかし、ガウルは空中で足に気力を纏って、再び優星に斬りかかってきた

優星「うそっ!?!」

振り下ろされる2本の剣をパラディオンで何とか抑える優星

ガウル「忘れんなよ？俺は気力の使い方に関しては自信があるんだからなあ！！」

両手剣にも気力を纏わせ、その勢いで優星を弾きとばす

優星「っ・・・！！」

耐性を崩しながら飛ばされたが、すぐに地面に着いて耐性を戻し構えなおそうとする優星

ガウル「遅えよ！！！！」

優星「！？」

優星の目には地面を蹴って先ほどと同じく優星に向かってきているガウルが映った

それを見た優星は右手を鞘にしまっているエクススの柄にそえる

ガウル「もらったあああ!!!」

ガウルは両手剣を優星に振り下ろす

ーヒュン、チャキ・・・

一瞬、何かが風を切るような音がその場に響いた

そして

ードオオオオオン!!!

優星に斬りかかっていたはずのガウルが城壁に吹き飛ばされていた

「な、何が起こったんだ!？」

「お、俺が知るか!!!が、ガウル殿下ー!!!?」

ガレットの兵士達が全員、壁に激突したガウルの側に走っていく

優星「ふう・・・」

優星はパラディオンを指輪に戻して、1息つく

？「あっちゃあ・・・ガウ様やられてもうた」

？？「ガウ様がこんなにあっさりとやられるなんて・・・」

？？？「流石・・・ビスコッティの勇者」

優星の後ろから3つの声が聞こえる

優星「あ、君達は・・・」

そこにいたのは、ビスコッティに来た初日の夕刻、ミルヒを攫った張本人達「ジェノワーズ」の3人だった

ジョーヌ「まだ名前をちゃんと saying てなかったな。うちはジョーヌ・クラフティ」

ノワール「私は・・・ノワール・ヴィノカカオ」

ベール「私はベール・ファールトンです」

3人が自身のの名前を優星に言う

優星「じゃあ僕も、津川優星です」

自分の名前も3人に告げる優星

そこに

ガウル「いつてえゝ・・・俺、なんで吹っ飛んだんだ？」

ガウルが後ろ頭をさすりながら此方に歩いてきた

ジョーヌ「そやー！なんでガウ様が吹っ飛んだん？うちがみてた限りは、勇者は何もしてなかったで？」

ベール「確かに・・・勇者様は、剣を振ってすらいませんでした」

ノワール「勇者・・・なにかしたの？」

優星「えっと・・・とりあえず、僕を勇者って呼ぶのは止めてくれないかな？」

ガウル「は、なんで？」

優星「だって僕とガウル達はそんなに年は離れてないでしょ？勇者なんて肩書よりも、名前で呼ぶ方がずっといいからさ」

ガウル「えゝでもよ・・・」

優星「じゃないと、なんでガウルが吹き飛んだのか教えないよ？」

ガウル「あゝ・・・うゝ・・・分かったよ！！優星、これでいいだろ！？？」

優星「うん」

悩みながらも、結局優星の名前を素直に詠んだガウルに答える優星

ジョーヌ「ほな、優星。これから宜しくな」

ベール「宜しく、優星さん」

ノワール「・・・よろしく」

ジェノワーズの3人も優星を名前で呼ぶ

優星「じゃあ、なんでガウルが吹き飛ばされたのかだけど――」

？「鞘に納めてあつたエクスを、超スピードで抜刀。それで生じた風の力でガウルを吹き飛ばしたんだよね」

優しい声が、訓練場に響く

声の方向を向くと、金色の髪をなびかせた女性―フェイトが立っていた

ガウル「か、風・・・？」

フェイト「うん、優星は威合いの要領でエクスを抜き去って、ガウルに怪我をさせないように吹き飛ばしたんだよ。微かにだけど、風を切る音とエクスを鞘にしまう音が聞こえたし」

優星達の傍まで歩いてきたフェイトがそう言う

優星「やっぱり・・・フェイトには見えてたか」

フェイト「一応・・・ね、だって・・・優星はまだ本気を出してなかったから」

ガウル・ジエノワーズ「え!？」

フェイトの言葉に驚く4人

フェイト「本気の優星は——」

優星「ストップ、此処で話すのは無し」

フェイト「ごめん・・・じゃあ、優星。ちょっとついてきてくれるかな？」

優星「うん」

フェイトの後をついていく形で、優星は城内に入っていた

ガウル「・・・あれで、手加減してたのかよ」

その後残ったガウル達は、優星が来る前まで行っていた訓練をさらに気合いをこめて再開した

フェイト「ビスコッティを救う事が、この世界での優星がすることなの？」

優星「うん、多分・・・」

ガレット城のフェイトにあてがわれた部屋のベッドに腰掛けながら
2人で話す

フェイト「それに・・・召喚された勇者は、元の世界に帰れない・
・か」

どこか寂しそうに言うフェイト

優星「聞きたかったんだけど・・・なんでフェイトがこの世界に？
召喚されたのは僕だけのはず・・・」

フェイト「うん・・・部屋で休んでた時、カードから光が灯ったの」

フェイトが僕との繋がりであるあのカードを取り出す

フェイト「光はそのままカードから離れて、1つの球体になったんだ・
・・そこから、うつすらと木々や川が見えて・
・・手を伸ばしたら、身体ごと包まれて・
・・気が付いたら、映っていた場所に座ってたんだ」

優星「木々と、河原・・・あそこって事は・・・僕が、魔法を使っ
たから・・・？」

1人ごとのように呟く優星

フェイト「でね・・・音がして、その方向に向かったら捕まっちゃって・・・そのまま、レオンミシエリ閣下の元まで連れて行かれたんだ」

優星「そっか・・・でも、なんでレオンミシエリ閣下の傘下に・・・？」

フェイト「そ、それは・・・／＼／」

僕の問いにフェイトは頬を赤らめて顔をそらす

フェイト「と、とにかく！！私は優星の手伝いをするから！！！！」

顔を赤くしながらも、優星に言うフェイト

優星「うん・・・ありがと、フェイト」

僕は嬉しくなってフェイトを両手で抱きしめる

フェイト「ふえ！？ゆ、優星！？／／／」

突然の事にフェイトは声を高くして驚く

優星「・・・っ」

久々に触れた大事な人の温もりに、僕は自然と涙を零していた

フェイト「・・・・・・・・」

それに気づいたフェイトは、自分の手を僕に回して抱きしめてくれた・・・

優星「ふう・・・・・・・・・・」

あの後数分程、抱き合っていた僕達だったが少し城を見てみたい為部屋から僕だけが退出していた

―ガシャーンッ！！―

優星「！？」

少し先の部屋から何かが壊れる音が聞こえる

？「何故じゃ！？何故・・・・・・・・こんなっ！？」

部屋の中から声が聞こえ、どの部屋なのかはつきりとした僕はその部屋の扉の前に立つ

？「こんな・・・・・・・・こんな事があつてたまるものか・・・・・・・・！！」

優星「レオンミシェリ閣下・・・・・・・・？」

僕は扉を開けて中に入る

部屋の中はカーテンで閉められて暗かったが、部屋の中央に光る何かが置かれておりその傍にいるレオンミシエリ閣下の姿がしっかりと映っていた

光っている物体―鏡のようなものには、赤い液体を流して倒れるミルヒオーレ姫様と・・・僕の姿が映っていた

レオンミシエリ「ゆ、ゆう・・・せい!? な、何故貴様が此处にいる!？」

僕に気が付いたレオンミシエリ閣下が焦りながら問いかけてくる

僕はそれを無視して、鏡の前―レオンミシエリ閣下の隣まで近づく

優星「・・・これは？」

少し低い声で、レオンミシエリ閣下に尋ねる

レオンミシエリ「・・・これは「星詠み」、紋章術の一種で・・・差はあれど未来が見えるものじゃ・・・」

優星「・・・未来」

僕は鏡をじつと見つめる、そこには先程まで気が付かなかったフロニヤルドの文字が書かれていた

レオンミシエリ「この星詠みでは・・・」「30日以内、神剣を所有者は必ず死を迎える」と・・・書かれておる」

優星「・・・」

そう言って、鏡に映る星詠みを消し、明りをつけるレオンミシエリ

レオンミシエリ「貴様には・・・知られたく、なかったのじゃがな」

優星「・・・どうする、つもりなんですか・・・？」

今の星詠みをみたうえで、どうするかをレオンミシエリに尋ねる優星

レオンミシエリ「なに・・・これは神剣の所有者のみが死ぬと書かれておる。今度仕掛ける戦に、ガレットの神剣と、そちらの神剣をかけさせ・・・わしらが、勝つ。それだけじゃ」

レオンミシエリは何も問題が無いように優星に言う

優星「それでは・・・あなただけが、この運命に飲み込まれると言う事ですよ?」

レオンミシエリ「構わんさ・・・どうせ、わしを失っても悲しむものなど――」

そう言いかけたレオンミシエリに優星は彼女の両肩を力強く掴んで、床に押し倒した

レオンミシエリ「な、何をす」誰も悲しまない・・・? 本当に、そう思っているですか?」勿論じゃ・・・」

優星「なら・・・何故、今の貴女は・・・そんなに悲しい表情をしているんですか?」

レオンミシエリ「っ!?!こ、これは・・・」

隠し切れていなかった表情を指摘され、レオンミシエリは戸惑う

優星「悲しむ人はいます！！ミルヒ姫様や、ガウル・・・ガレットの国民が！！」

レオンミシエリ「ミルヒ・・・が」

優星「星詠みを見て・・・分かりました、あなたが何故・・・ミルヒ姫様と向き合わないのかを・・・少しでも、自分と離れさせて・・・悲しみを少なくしようと、していたわけですね」

レオンミシエリ「わしは・・・わしは、護りたいのじゃ！！わしにかけがえのない安らぎをくれたあやつを・・・失いたくななどないのじゃ！！！」

涙目で優星に本心を吐きだすレオンミシエリ

レオンミシエリ「最初はあやつを守るために手を打っていた・・・じゃが、時がたつにつれ星詠みは回避出来ないほど大きく変わってしまった！！もう・・・わしが、犠牲になつて・・・救うしか方法は・・・！！！」

そして、涙を零して優星に泣きつくレオンミシエリ

優星「・・・例え、貴女を犠牲にしても・・・残った人達全員が傷

ついでしまっ」

レオンミシエリ「・・・・・・・・・・」

優星「だから・・・変えるんだ、運命を」

レオンミシエリ「変・・・える？」

優星「うん。言いましたよね・・・？僕は、貴女をほおっておく事が出来ないって・・・あなたに、何かが起きるのなら・・・剣となつて、全てを斬り伏せるって」

レオンミシエリ「・・・・・・・・・・！！」

優星「だから・・・変える。こんな・・・運命を」

レオンミシエリ「本当に・・・変えられるのか・・・？この、運命を・・・？」

レオンミシエリは瞳を揺らしながら、震えた声で優星に問いかける

優星「決められた運命なんて、僕は認めない・・・運命は、人の手で・・・自分の手で切り開いていくものだから!!!」

優星の言葉を聞いたレオンミシエリは、涙を再び零し始めた

レオンミシエリ「何故じゃろうな・・・貴様の言葉を聞いていると、本当に変えられると思えてくる・・・」

指で涙を拭いながら、優星に言う

優星「大丈夫です・・・きっと」

レオンミシエリ「ああ・・・」

お互いにそう言い、数秒間見つめ合う2人

ビオレ「レオ様・・・？そろそろ、お時——」

そこに、扉を開けて1人の女性が入ってきた

レオンミシエリ「ビ、ビオレ・・・？」

ビオレ「・・・し、失礼しました!!!!」

ビオレはそう言って扉を閉めて走り去っていった

レオンミシエリ「・・・・・・・・／／／」

優星「・・・・・・・・レオンミシエリ閣下？」

優星がレオンミシエリに視線を戻すと、レオンミシエリは頬を赤く染めていた

レオンミシエリ「い、今思えば・・・貴様は、大胆なのじゃな・・・／／／」

優星「・・・はい？」

レオンミシエリ閣下の言葉の意味が分からず、僕は首を傾げる

レオンミシエリ「こんな・・・体と体を近づけるように・・・わしを押し倒したのじゃから／／／」

優星「……………す、すみません!!!!／／／」

やっと理解した僕は直ぐにレオンミシエリ閣下の上から体をどける

レオンミシエリ「……………優星」

優星「は、はい!!」

名前を呼ばれ、おびえながら答える

レオンミシエリ「……………頼りにしとるぞ?」

期待のこもった目で僕を見るレオンミシエリ閣下

優星「……………はい」

僕はそれに、しっかりと答えた

優星 side out

第8話 星詠みに課せられた運命（後書き）

やっと出来た時間を使つての勇者様とのお話

何度も迷惑をかけて、さらに故郷に帰れないかもしれないという事まで出来た事を謝つて

でも、勇者様は私は悪くないと・・・優しく言ってくれて

それが・・・本当に嬉しくて、心が温かくなって

もっと・・・親交を深めていきたい、そう思った

次回、第9話「開戦前夜のお茶会と朝のお散歩」

私は知りたい・・・貴女の・・・・・・・・優星の事をもっと!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307t/>

DOG DAYS ~ 黒蒼の作り出す物語 ~

2011年10月7日15時04分発行